
ネギまロワイヤル

蒲原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまロワイヤル

【Nコード】

N1818I

【作者名】

蒲原

【あらすじ】

——20XX年、日本政府の財政は崩壊した。そして大人は自分達が生き残るために、一握りの子供を見棄てるため、中学生を対象とした残酷な法案、BR法を設立する。

今年選ばれたのは、麻帆良学園にある女子中等部。突如平穏な日常が崩れ去る……先にあるのは絶望という名の暗い闇、放り込まれた彼女達は、何を思い、何を考え行動に出るのか……私、このまま死ぬのかな……死にたく、ないな……！

これは、バトルロワイヤル×魔法先生ネギまのコラボ作になります。
苦手な方はここで引き返して下さい。

プロローグ、絶望の始まり（前書き）

まず、赤松先生ならびに関係者の方には一切関係ありません、下敷き代わりにお借りしましたが、この場を借りて謝罪しておきます、すみません。

原作と違う点がいくつかあります。

さよちゃんが幽霊ではないこと

エヴァが吸血鬼ではないこと

刹那が鳥族とのハーフではないことです。

つたない文章ですが、読んで少しでも生きる、または死ぬということとはどういふことなのか考えて頂ければ幸いです。

評価や感想、お待ちしております。

プロローグ、絶望の始まり

—— 20XX年、日本政府の財政は崩壊した。

そして政府は、いや大人は自分達が生き残るために、一握りの子供を見棄てることにし、中学生を対象とした残酷な法案、BR法を設立した。

ここ、麻帆良学園女子中等部も例外ではなく、運悪く今年のBR法に選ばれたクラスもまた……この中等部にあった。

『……ん、ここ……何処？』

女子八番、神楽坂明日菜はふと目を覚まし、まだぼんやりする頭で辺りを見渡した。

確か、今は英語の授業中だったはず……いつの間に寝ていたんだろう。など考えていたのだが、それにしては妙だった。

確かに、居る場所は教室だ。

しかし、自分達の知っている教室ではない……古い、今にも崩れそうな木造校舎、窓は寂れてボロボロになり、所々ガラスが朽ちて無くなっている。まるで、自分達を残して教室そのものが過去に遡ってしまった、そんな印象を明日菜に与えた。やはり、何かが変だ……今度は、クラスメートを見てみる。

皆、眠ったように体を机に預けている。

いや、事実寝ているのだ、少なくとも、左右の見える範囲では。

あの勉強熱心なさよちゃんやいいんちよですら、机に伏っしている……ますます妙だ。

『このか、このかつてば……』

隣で寝ている、親友の十三番、近衛木乃香の肩を揺すって起こしてみる。

『……ああ、アスナ、おはよお、もう朝なん?』

寝ぼけ眼を擦りながら、木乃香が目覚めます。寝ぼけているのかして、朝だと勘違いしているようだ。

『今は教室よ、寝ぼけてない、で……?!』

半ば呆れながら、皆を起こすのを手伝つてと言おうとした明日菜の目に、あるモノが入ってきた。上体を起こした木乃香の首に、金属製の首輪が付いていたのだ。

ハツとなり、自分の首に手を当てる。ヒンヤリとした冷たい感触、間違いなく、そこにも首輪はあった。認識したせいかして、少し息苦しさを感ずる。

『……アスナ、どないしたん?』

親友の様子がおかしい……首に手を当てて驚愕に目を見開いている。そつと、自分の首に手を当ててみて、その意味に気付いた。

手が震えてくるのが分かる、唇が一気に乾き、言葉がでない。アスナも同じらしく、恐怖を帯びた目でこちらを見ていた。

暫くして、皆が目覚まし各自首輪に気付いてくるとザワザワと室内が慌ただしくなる。

ある者は不安気に辺りを見渡し、ある者は友達と固まって話をし、またある者は状況を飲み込んだのか、何も言わずにじっと考え事をしているようだった。

『……お嬢様、明日菜さん』

『あ……せつちゃん』

目が覚め、首輪の存在に気付いた十五番、桜咲刹那は、友人達の元へと歩み寄る。
二人とも、不安に包まれどうすればいいのかわからないと訴えているようだった。

『……刹那さん、これって……やっぱりアレだよね？』

『……おそらく、だとすると……姿の见えないネギ先生の事が気になるります。無事だといいいのですが……』

そう言い、教卓に目をやる……いつもならそこにいるはずの担任、ネギ・スプリングフィールドの姿はなかった。

もし自分達の推測通りだとすると、まだ若冠十歳でしかない彼の安否が気になる。

死んでいなければいいのだが……

『ネギ君、大丈夫やるか……？』

お嬢様が、ふいに呟いた。不安を掻き消そうとするかのように、明日菜さんが続く。

『だ、大丈夫よ！ネギのことだし、きっと無事。助けを呼びに行っ

てるんじゃないかな？」

声が、震えている。精一杯に強がってみせているが、彼女がいくらバカレンジャーと呼ばれるほど頭が悪いからと言っても、法案に反対した者が辿る末路を覚えていないわけがなかった。

まもなくして、教室の扉が開いた。小さな袋を小脇に抱えた女性と何人もの武装した軍服姿の兵士達がゾロゾロと入ってくる。場が一気に緊張に包まれて静かになる。

『立っている人は、席に戻りなさい。これからHRを始めます』

皆、不安ながらに席に戻る……私も、お嬢様の傍を離れて自席にいた。

『はじめまして、皆さんここにこうしている事の意味を理解しているとは思いますが、改めて……今年のBR法案にこのクラスが選ばれました。担当するのは私、なるはまきょうこ鳴浜京子です。皆さん、よろしく』

無愛想に言葉を紡ぎ、小脇の袋を教卓に置く。皆、なにも喋らない。信じたくなかった現実を告げられて放心状態のようだ。

『皆さん、授業で習いすでに知っているとは思いますが、簡単にBR法案について……なんですか？えーっと、女子二十五番の長谷川千雨さん』

『いちいち説明しなくったってこっちは分かってるよ、あれだろ？

子供を育てられなくなった大人が作った殺しあいゲームで、選ばれたクラスは最後の一人になるまで殺しあいやるってやつ」

女：鳴浜って言ったか。名簿を見ながら手をあげた私を指名したから、めんどくさいと言わんばかりに答えてやった。

まったく、なんで私がこんな目に遭わないといけないんだ…！

『その通りです、皆さんにはこれから3日間殺しあいをして貰います。毎日朝、昼、夜と三回の放送で死亡者と首輪に連動した禁止エリアを発表するので、聞き漏らしのないように。なお、首輪は外そうとすれば爆発しますし、丸一日誰も死ななかった場合にも爆発します。その辺りは授業で習ってる通りです、他に質問は？……はい、女子十六番、佐々木まき絵さん』

『……ネギ、君…担任のネギ先生は…、何処ですか？』

恐る恐る手をあげて、尋ねた。ここにいない以上、どうなってるかなんて考えたくはない。ただ、無事に学校にいてくれてさえいれば……

『ネギ・スプリングフィールド先生なら、ココにいますよ？貴女方の参加を拒んだばかりに、死ぬことになりましたけど』

教卓に置かれた袋の閉め口を解放すると、変わり果てたネギ君の首があって、虚ろな目をしていた。

ひっと誰かが小さく声をあげた、恐怖が教室に満ちる……私は担当する際に感じるこの空気が堪らなく好きだった。はじめた頃は気の

毒だと感じたこの仕事も、今ではすっかり馴染んでいる。フフ……心が壊れてしまったのかしらね。今の状況を楽しいとさえ感じてしまふのだから。

口元が緩むのを堪え、室内を見渡す……誰も質問はしてこない、次に進もう。

『簡単な説明はここまでにして、皆さんにはこれから武器と食料を配布します。この建物を含むGの7エリアは皆さんがでた五分後に禁止エリアになります。それまでにエリア外に出てないと首輪が作動するので気をつけて下さいね？では、女子一番の……なんでしょうか？女子二十九番の、雪広あやかさん』

効率よく進めようとしているのに、いきなり机を叩いて立ち上がり、目の前まで来る。

ほんとに困った生徒ね……私は、ポケットから小さなりモコンを取り出しながら聞いた。

『納得いきませんわ！私達が選ばれたというのも気に入りませんし、なにより無関係なネギ先生を殺すなんて……今すぐ雪広財閥に連絡して貴女方の処遇を……？』

突如、ピ、ピ、ピ……と警告音が鳴り始めた。なんの音なんだろうと辺りを見渡す。そして気付いた、自分の首輪から鳴っている事に。驚いて目の前にいる憎い相手を見た。手元にリモコンがあり、指がそれを押している。

『用件はそれだけかしら、お嬢ちゃん？丁度いいし……血気盛んな貴女には見せしめに死んで貰うわね？』

クスクスと目の前の女が笑う……死ぬ？

私が…？

どうして……何故、私が死なくてはならないの？

恐怖からか、体が後退りしてしまう。音は次第にけたたましく鳴り響きはじめ、思わず立ち上がったのであるうアスナさんの方へ目をやった瞬間に……私の意識は闇の底に沈んでいった。

『……いいん、ちょ……？』

小さな爆発の後、いいんちよの体が崩れ落ちた。いいんちよの体が、血の海に横たわる……小等部からずっと一緒に、喧嘩友達で……お互いに認めたくないけど、でもどこか奥底では認めあつて……そんな友達が、あっけなく死んでしまった。脱力し、力なく席に座る。目の前にいたさよちゃんと朝倉が、血を浴びて恐怖に体を震わせているのが目に入った。

『さて、齋^{さい}は投げられました…改めて、出席番号順に出発して貰います。女子一番、相坂さよさん…武器や食料の入った袋を貰って出発してください、五分後に朝倉さんに出て貰います。なお、武器にはアタリハズレがありますので。』

小さく怯えて、さよちゃんが出ていった……それから、五分感覚で皆が出ていく。睨み付けて行く人、今にも泣き出しそうな人……それは様々。

こうして……私達の悪夢は、始まった。

『女子八番、神楽坂明日菜さん』

はたして、私に生き残れるのだろうか……この、命懸けのゲームを

……

ブローグ、絶望の始まり（後書き）

女子一番、相坂さよ
女子二番、明石裕奈
女子三番、朝倉和美
女子四番、綾瀬夕映
女子五番、和泉亜子
女子六番、大河内アキラ
女子七番、柿崎美砂
女子八番、神楽坂明日菜
女子九番、春日美空
女子十番、絡操茶々丸
女子十一番、釘宮円
女子十二番、クーフェイ
女子十三番、近衛木乃香
女子十四番、早乙女ハルナ女子十五番、桜咲刹那
女子十六番、佐々木まき絵女子十七番、椎名桜子
女子十八番、龍宮真名
女子十九番、超鈴音
女子二十番、長瀬楓
女子二十一番、那波千鶴
女子二十二番、鳴滝風香
女子二十三番、鳴滝史伽
女子二十四番、葉加瀬聡美女子二十五番、長谷川千雨女子二十六番
エヴァンジェリン
女子二十七番宮崎のどか
女子二十八番、村上夏美
女子三十番、四葉五月
女子三十一番、ザジ・レイニーデー

残り30名、死亡者一名

女子二十九番、雪広あやか。

反発したため、見せしめに首輪を作動されての爆死。

第一夜（前書き）

暫くは、第一夜が続くかと思われます。

まずは図書館探検部、仲良し三人娘からです。

親友だからこそ………続きは本編でどうぞ。

プロローグよりは若干短いかわれます。

なお、この場所において明かされないある人物の想いは次話にて明らかにしたいと思います。

第一夜

カサカサと茂みを掻き分ける音がする。

今や漆黒の闇と化した森の中を、慎重に辺りを伺いながら歩く、一人の影。

女子四番、綾瀬夕映である。

『まさか、こんな展開になるとは思ってもみませんでした……のどかはまだ無事でしょうか…』

建物を出ると、校庭があり、やはりどこかの学校にいたのだと認識できたです。

しかしながら、この場に留まり仲間を集めるなど、あながちいい策とは思えませんでした。疑うわけではありませんが、先に出た三名がゲームに乗らないと断言できません、うかうかしていると、此方の命が危うくなります。

なにより、ハルナはまだしも親友であるのどかが出てくるまでいささか時間がかかりすぎますし。

そう考えて、まずは手近な森に身を潜めることにしました。校舎からそう遠くなく、また近すぎもしない場所で様子を伺うつもりだったのですが……

『迷ってしまったあげく、のどかは既に出発してしまっていたとは……』

不覚でした、到着する頃には丁度四葉さんが出てくる頃合いで、少

し焦りました。

『確か、島なら南の端でおちあう約束でした…もうじき着くはずなのですが……』

茂みを掻き分け、ようやく海が視界に入ってきた所で、私は一息つきつき、辺りを見渡します。

端の方を見ると、既に二人は到着していました。

私は二人に駆け寄ります。

『ゆえってば、やっと到着したわね。もー、真っ先に出ていったア
ンタが来てないから殺られちゃったのかと思ったじゃない』

『でも、ゆえが無事でいてくれてよかった……』

『すみませんです、少々道に迷ってしまっていました』

ゆえはばつの悪そうな顔をして謝ってきた。

別にいいのよ、と肩を軽く叩いた後でのどかとゆえをしゃがませる。

『じゃ、作戦会議と行こうじゃないの…まずはぶきの確認からね。
のどかは？』

『私は…、ナイフとフォーク…？』

あらら、完全ハズレね……これじゃ使い物にもならないか。
キョトンとしたのどかをよそに、ゆえの方を向く。

『で、ゆえは？』

『私は…、マグナム系統の銃ですね。初心者な私には扱いづらそう

な武器です……』

銃か……これは使えるわね、となると後は……私はそつと後ろに置いておいた鞆に手をやり、中からあるものを取り出し、静かに手に忍ばせる。

『ん……ゆえはともかくとしてのどかは完全ハズレだね、それで……今後のことなんだけど』

耳をかせと、二人に合図をする。

『ちょっと待つです！そういうハルナの武器はなんなんですか？自分だけ隠すなんて、むしがよすぎるです。私達はハルナの友人として知っておく権利があると思うのです。教えてください』

ブスツとした顔で、ゆえが詰め寄ってくる。

私は満面の笑みを見せ、見せるからもう少し近くに寄って？と告げた。

『もしや、それほど他人に見つかるはず武器なのですか？』

『近くってどのくらい？ハルナ』

二人とも、疑う要素も持たずに射程範囲内に入ってきた。左手に隠していたソレを、左右の手に後ろ手で分ける。

『私の武器はね……コンバットナイフ二丁なの』

同時に二人の後頭部、首の辺りにソレを突き立てた。

——ズブ、とソレはあっけなく二人の首を突き抜けた。

『御免ね……二人とも。でもさ、これがルールだから許してね？』
何が起ったのか理解できていない二人に、まるで悪戯でもしたかのような笑みを見せながら、ナイフを引き抜いた。

二人がそのまま前のめりになって倒れる。

引き抜く際に少し血が飛び散ったが、それ以上の血が二人の空いた喉から溢れてきた。

『……御免ね、ホントに。でもさ、すぐに私もそっちにいくからさ。そしたら……ずっと一緒にいようね？ゆえ、のどか……』

ふいに、涙が一滴零れた。

作戦なんか、あるわけがない。私達はここから逃げ出せないんだから……それならば、せめて死ぬときくらいは親友の二人と一緒にいい。

私の我が儘だけど……二人なら、許してくれるよね？

海の彼方に見える、監視船に目をやる。

プカプカと不気味に浮いているソレを見ながら、ゆえの銃を手に持つてこめかみに当てる。

『私の望みは、三人でいつまでも一緒にいること……誰にも邪魔されず、一緒にいられるね？ゆえ、のどか……』

ゆっくり、二人を見る。驚いた顔をして、地面に横たわる二人を見ながら、私はゆっくりと引き金を引いた。

——パンツという乾いた音の向こうに、駆け寄ってくる人影が見

えたような気がした。

第一夜（後書き）

女子一番、相坂さよ
女子二番、明石裕奈
女子三番、朝倉和美
女子五番、和泉亜子
女子六番、大河内アキラ
女子七番、柿崎美砂
女子八番、神楽坂明日菜
女子九番、春日美空
女子十番、絡操茶々丸
女子十一番、釘宮円
女子十二番、クーフエイ
女子十三番、近衛木乃香
女子十五番、桜咲刹那
女子十六番、佐々木まき絵女子十七番、椎名桜子
女子十八番、龍宮真名
女子十九番、超鈴音
女子二十番、長瀬楓
女子二十一番、那波千鶴
女子二十二番、鳴滝風香
女子二十三番、鳴滝史伽
女子二十四番、葉加瀬聡美女子二十五番、長谷川千雨
女子二十六番エヴァンジェリン
女子二十八番、村上夏美
女子三十番、四葉五月
女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り27名、死亡者三名

女子四番、綾瀬夕映。

友人、早乙女ハルナの不意打ちで喉を衝かれてのショック、ならびにそれに伴う出血により死亡。

女子二十七番、宮崎のどか。綾瀬夕映と同上。

女子十四番、早乙女ハルナ。

友人、綾瀬夕映と宮崎のどかを殺害後、綾瀬夕映の所持していた拳銃で頭部を撃ち抜き自殺。

第一夜？（前書き）

友達を殺し、自分をも殺したハルナの想いとはなにか。
それを目撃したのは……それらは本編にて明かされます。

感想頂けるとありがたいです。つたない文章ではありますが、最後までお付き合い寝返れば幸いです。

第一夜？

『……これでよし。それにしても、ゆえったらなんで来てないんだろ？』

時は少しだけ遡る。

これは、まだ宮崎のどか、綾瀬夕映が到着するまえのこと、女子十
四番、早乙女ハルナは三人で決めた約束の場所で到着していない親
友二人を待っていた。

と、いつても四番の綾瀬夕映は自分より先にでているはず
なのに到着していないので少し不安な様子で辺りを見渡す。
まだこない……これでは計画が水の泡だ。

『まあ、ゆえがいないお陰で遺書は書けたからその点は感謝しない
とね』

そつと、書いた遺書を鞆に忍ばせる。そして、改めて自分の武器を
確認する。

『コンバットナイフが二丁……か』

この武器で、私は今これから来るだろう親友を殺そうとしている。
おバカだけど常に冷静でストッパーになってくれる夕映、少し引っ
込み思案だけど、頑張りやなのどか……

いつからだろう、そんな二人と、永遠に一緒にいたいと思うように
なったのは……

狂愛、人は恐らくそう呼ぶだろう。

ずっと一緒なんて、絶対無理な話……いつかは大人になって、それ
ぞれ別の道を歩かなければならない。

でも、それが叶わないと分かっているからこそ、私は二人を殺す。
そして、私自身もすぐに後を追う……それが、私の歪んだ愛の結末。

暫くして、二人が到着し私は私の我が儘を満たすためだけに、二人を殺した。

そつと、夕映の持ち物だった銃をこめかみにあてる。

ああ……これでいつまでも一緒にいられる。

そう思っ、私は穏やかに満ちた心で、引き金を引いた……

消え行く意識の向こうで、このかが駆け寄ってきたような気がした……

『ハル、ナ……ゆえ……のどか……』

間にあわなかった……ハルナが自殺しようとしたのに、それを止められなかった。

脱力して、その場に崩れるように倒れたうちを、せつちゃんが支えてくれた。

『せつちゃ……うち、うち……止め、れ……助……られ……かったあ……！……』

せつちゃんに、泣き付いた……同じ図書館探検部の一員として何度か部活も一緒にやった、仲もよかった……なのに、肝心なところでうちはなんもでけへん……それが、悔しくてしかたなかった。

『11のか……』

どう、声をかければいいのか解らなかった。

学校をでて、とにかくすぐその場を離れた。

走って、走って、できるだけ学校から離れた後どうするべきかと考えながら歩き、やがて集落に辿り着いた。

そこで、偶然にも刹那さんとこのかに再会したのだ。

このかが出る際に合流場所を刹那さんがメモにして渡していたのだと、後で知った。

それから、仲間を作ろうと森をさ迷っているうちにこの場所にきたのだけど……やっぱり誰かが死ぬところを見るのは辛かった。

ネギの首を見たときも、いいんちよの首輪が爆発した時も……ただ辛さだけが胸に残った。

『……明日菜さん、少しの間お嬢様をお願いします』

辛そうに顔を背ける明日菜さんに泣いているお嬢様を預け、なるべく三人を見ないようにして、鞆の中を探った。

持っていくのは気が引けたが、食料は多いほうがいい。与えられた水と食べ物を取り出す。

『……これは？』

早乙女さんの鞆から、手紙を見つけた。

小さく、遺書と書かれている。

……カサリと、それを開いてみた。

……この手紙を読むのが誰かは解らないけど、一つだけお願いがあります。

私が殺したのどかと夕映、そして後を追う私自身を、私を中心とし

て横一列に並べて、その手を、三人固く握らせて下さい。

私は、いつまでも二人と一緒にいたいから……身勝手な想いだけど、せめて最後くらいは、手を繋いでいたいから――

『……刹那さん？』

今だ、涙を止め切れないこのかの肩を抱きながら、その背中に呼び掛けた。

刹那さんは、三人の開いた眼を静かに閉じると横に並べ、その手を静かに握らせた。

どうしてそんな事をするんだろうと考えた私を見透かしたのか、こちらに戻って来た刹那さんは口を開く。

『早乙女さんの願った事です。このような状況になった今、私にできる精一杯の弔いです』

なんて、無力なんだろう……どんなに強くなっただって、剣術を身につけていたって、肝心な時に役に立たない。

大切な友達の命すら、護れないなんて……私は唇を噛み締めた。その時、森の奥から何かが飛んでくるのに気付いた。

慌てて反らすその頬を、ライフルの弾が掠めていった。

『……ほう、今のに気付くとはたいしたものだ。流石は刹那、か……』

三人から少し離れた森の中、そこでライフルを構えていたのは女子十八番、龍宮真奈だった。

『これも仕事だ、悪く思わないでくれよ、刹那』

再び、その顔に狙いを定める。

- - - 仕事、そうこれはいつもやっている裏家業と同じだ。
ただ、殺すターゲットが悪人からクラスメートに変わった、それだ
けのことだ。

そう思うことにした私は、再び引き金を引いた。

第一夜？（後書き）

女子一番、相坂さよ
女子二番、明石裕奈
女子三番、朝倉和美
女子五番、和泉亜子
女子六番、大河内アキラ
女子七番、柿崎美砂
女子八番、神楽坂明日菜
女子九番、春日美空
女子十番、絡操茶々丸
女子十一番、釘宮円
女子十二番、クーフエイ
女子十三番、近衛木乃香
女子十五番、桜咲刹那
女子十六番、佐々木まき絵
女子十七番、椎名桜子
女子十八番、龍宮真名
女子十九番、超鈴音
女子二十番、長瀬楓
女子二十一番、那波千鶴
女子二十二番、鳴滝風香
女子二十三番、鳴滝史伽
女子二十四番、葉加瀬聡美
女子二十五番、長谷川千雨
女子二十六番、エヴァンジェリン
女子二十八番、村上夏美
女子三十番、四葉五月
女子三十一番、ザジ・レイニー・デイ

残り27名、死亡者0

第一夜？（前書き）

追う龍宮、逃げる刹那達。それを助ける人物の口から、ある意味で最も自分の気持ちに正直なのだろう人がゲームに乗った事を聞かされる。

まだまだ続きます、感想、評価、あればよろしくお願いします。

第一夜？

音はしなかった、沈み行く夕日の僅かな光が弾に反射しなければ、いくら私とて避けられなかっただろう。

再び発射されてきたライフル弾、これもなんとかかわすことが出来た。

既に日は落ちて来ている、闇が訪れれば、ますます状況は不利になるだろう。

『お嬢様、明日菜さん、走って森に逃げ込みましょう……！誰かは解りませんが、このままでは殺されてしまいます……！！』

二人をせかすようにして、綾瀬さん達の食料を手にとって叫んだ。

二人もすぐに行動にでくれたので、先導して森に飛び込む。

『森の中なら、私が狙撃しにくいとでも思ったか？刹那、君らしくないな……』

素早く狙いを定め、わざと足元を狙った。

これなら、刹那もすぐに私だと気付くだろう。

せっかくの好敵手を見つけたんだ、少しばかりは狩りを楽しませて貰うよ。

『…………やはり龍宮か、厄介な相手に見つかったな』

本来、森の中というのは木々に遮られて視界が悪くなり、狙撃するのは無駄弾を撃つようなものである。

しかし、この狙撃主は的確に足元を狙い、なおかつわざと外している。

自分が誰だか解るだろう？という龍宮らしいメッセージだと感じた。

『あそこです、一先ずあの岩場に身を隠しましょう…！』

手頃な岩場を見つけ、そこに三人で滑り込む。
同時に、音がやんだ。

『何だ刹那、鬼ごっこはもうおしまいかい？』

ふいに、声が響く。森に反響するため、場所の特定はできないが、確かに龍宮はすぐ傍まで来ていた。

『この声、龍宮さん…？ちょっと、危ないじゃない…！！当たったらどうすんのよ！？』

『いや、アスナ…こちらにあてるんが目的やと思うんやけど…』

アスナの叫びに苦笑いがでた、ほんまにこのゲームの趣旨、分かってるんやろか……

『神楽坂、君はまだこのゲームを理解していないようだな、これは殺しあい……生きるために他人を蹴落とすゲームだろう？命を狙って何が悪い』

ざわつく森の中で、声のみが反響してくる。

『……しかし龍宮、こんなことをして何になる、お前ほどの実力者

なら本部を強襲してゲームを強制終了させることだってできるだろう……!!何故だ…、答える!」

『…………甘い、甘い刹那。君は何も分かっていない、此処は戦場だよ?戦場を生きるためには、敵を討つしかないだろう。その敵が君達だというのなら、私は情を消して討つだけだ。……しかし、残念だよ。このような形で刹那、君という最大のよきパートナーを失うのだからね。さあ、もう終わりにしようか』

私としたことが、少し喋りすぎた。楓辺りに見つかると、なにかとマズイ……そろそろ終わりにしよう。

再び、銃を構えた。長年の経験から、どこに弾を飛ばせば刹那達を仕留められるかがわかる。跳弾で仕留めるか……そう思い標準を合わせた。

その時、背後に気配を感じ、素早くそちらに銃を向ける

『フム、流石は真名でござるな。しかし、真名らしからぬミスもしているでござるよ?』

今見つかる何かとマズイ、先ほどそう考えた女子二十番の長瀬楓に言われ、ふと弾を見る。狩りを楽しんだ影響からか、弾切れを起こしていた。

『…………っ!』

マズイ、今楓に狙われたら確実に死ぬ……そう思ったが

『お主を殺すのは忍びない……見逃すのでどうか考えを改めてはいただけぬか?…それでは、これにて御免っ!』

楓お得意の煙幕で、あっさりと引いていった。

おそらく楓にも仲間がいたのだろう、目を離れた隙に刹那達の気配も消えていた。

『……私を生かした事、後で後悔させるよ、楓……』

今から追っても、見失った今では体力を消耗するだけだ……今宵は諦める事にしよう。

夜も暮れた頃、助っ人に現れた楓らの導きで私達は再び集落の一角へと戻って来ていた。

楓がこなければ、確実に龍宮に始末されていただろう。

『このか、寝たわよ。散々泣いたから、泣き疲れたのかもね』

お嬢様が寝付いたのを確認し、明日菜さんが戻って来た。

『仕方のないことでござる……拙者達とは違い、共に共有する時間は長い方だったはず。故に、今はしばしの休息を取らせるのが1番でござるよ』

『楓、助けてくれて感謝する。ありがとう』

『よすでござるよ、刹那。拙者ら、そのように他人行儀にする仲間もないでござるう?』

『……ああ、そうだな』

刹那さんと長瀬さん、なんだか意味深に笑ってる……この二人の關係って、なんなんだろう?

女子十六番、佐々木まき絵は焚火を囲んで信賴しあう二人を不思議そうに見ながら支給されたパンをかじる。
そして、そつとアスナに耳打ちした。

『……ねえねえ、アスナ。あの二人って、どういう関係？』

『私が知る訳無いでしょ、まきちゃん、自分で聞いたらいいじゃない。なんで私に聞くのよ』

『……そうだよ、バカレッドのアスナに聞いたのが間違いだったよ』

ふう、とまき絵はため息をつく。しかしながらそう言われるとついついカチンときてしまい、明日菜は軽くまき絵の頬をつねった。

『言っじゃない、バカピンクのくせして……』

まけじと、まき絵もやり返す。もはや子供の喧嘩だが、楓や刹那はつい笑みを零してしまう。

『いやなに、少しばかり一緒にアルバイトをしていただけでござるよ。故に拙者らにはそれなりの絆のようなものがあるのでござる』

『……しかしながら、さっきの話は本当なのか？楓。私には長谷川さんがゲームに乗るようには思えないのだが』

『……千雨ちゃん、私達の事が前から嫌いだったって。だから、そんな奴らに殺されるくらいならこっちから先に殺してやるんだって……』

『まきちゃん……』

涙ぐむまきちゃんを抱き寄せ、軽く頭を撫でる。

『少なくとも、まき絵殿、そして拙者の見たことを伝えるならば、千雨殿は既に三人殺している事になるでござるよ』

『……私達、何でこんな事やってるんだろうね。いつもならさ、ネギの授業受けたり、寮に戻った後、皆でまたバカやったりしてさ……そんな毎日が何時までも続くものだと思ってた……なのに、なんでこんなところで殺しあいなんてしてるんだろ』

今いる民家の窓から、綺麗な星空が見えた。麻帆良の空よりも、ずっと澄んだ空……ふいに、涙が頬を伝う。

『そうだね……もう、ゆーなも、亜子も、ゆえちゃんも、アキラも、いんちよも、本屋ちゃんも……パルもいないんだよね。みんな、死んじゃったんだ……』

膝を抱えて、聞いた名前を呟いた……まさか、千雨ちゃんがゆーな達を殺すなんて、私は考えもしなかった……蘇った恐怖が、あの時の事を思い出させる……

第一夜？（後書き）

女子一番、相坂さよ
女子三番、朝倉和美
女子七番、柿崎美砂
女子八番、神楽坂明日菜
女子九番、春日美空
女子十番、絡操茶々丸
女子十一番、釘宮円
女子十二番、クーフエイ
女子十三番、近衛木乃香
女子十五番、桜咲刹那
女子十六番、佐々木まき絵
女子十七番、椎名桜子
女子十八番、龍宮真名
女子十九番、超鈴音
女子二十番、長瀬楓
女子二十一番、那波千鶴
女子二十二番、鳴滝風香
女子二十三番、鳴滝史伽
女子二十四番、葉加瀬聡美
女子二十五番、長谷川千雨
女子二十六番エヴァンジェリン
女子二十八番、村上夏美
女子三十番、四葉五月
女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り23名、死亡者三名

女子二番、明石裕奈。

。長谷川千雨の手により、殺害される。詳細は不明

女子五番、和泉亜子

明石裕奈と同上。

女子六番、大河内アキラ

明石裕奈と同上。

第一夜？（前書き）

前話において、殺人を犯したことになる千雨ですが……作
者の意図とは違う動きをしてくれました。
もちろん、いい意味ですが。

読者数が日に日になってくれているかぎりです。
なのでどうか、最後まで見離さずにお付き合い願います。

第一夜？

火を囲みながら、私はポツリポツリと話始めた。

最初は皆バラバラだったけど、偶然地図では南に記されている診療所で亜子に会ったのを境に、すぐ近くの崖から自殺しようとしていたアキラ、診療所裏手の森で怪我をしていたゆうなに再会できたこと。

診療所を拠点として仲間を増やそうとしていたこと、なんとか逃げ出せないものと相談している時に千雨ちゃんが診療所にきたことも…………

『…………なんだ、先客がいたのか。なら、私はほかをあたるよ、おまえらと一緒にいて、寝首をかかれちゃたまんねーからな』

疲れたからベッドがあるだろうここまできたが、そこには既に和泉達がいた。

このゲームじゃ、他人を信じるだけバカを見る。こいつらを信じるなんて、それこそ殺してくれと言ってるようなもんだ。さつさと離れようとしたが

『ひつどーい、千雨ちゃん！私達そんなことしないよ、さあ入って入って』

と、バカピンクのまき絵に捕まった。

こうなっては仕方がない、こいつらから食料を盗んでさつさとずらかろう。

ポケットの中に忍ばせた支給武器を握る。

万が一見つかった場合は、これで……

『……………いいのかよ、敵を簡単に招き入れて。私はおまえらを殺すかもしれないんだぞ?』

『でも、そうして疑ってばかりだと疲れるよ。長谷川さん、私達は敵じゃない。だから安心してここにいてほしい』

大河内が、いつもの調子で言う。真っ直ぐにこちらを見てくるもんだから、困ったようにして目を反らした。

『じゃあ、私ちょっと回り見てくるね。もしかしたら千雨ちゃんみたいに誰かいるかもしれないし』

『氣ーつけなあかんよ? まき絵』

和泉は、そう言ってまき絵を見送ると明石と一緒に厨房に立つ。

……………なんでだよ、こんなことしてたっていつかは敵同士になるんだぞ? なんでおまえらはそう呑気でいられるんだ……………いたたまれなくなり、私は荷物を纏めて診療所を飛び出した。

同時に、診療所が爆撃を受け、瞬きをするかしないかの間に、瓦礫と化した。

その隙間から、明石達の腕や足やらが見える。

死んでるのは、見て明らかだった。

『な……………なんなんだよいたい……………』

呆然としている私の前に、森に佇む朝倉の姿が見えた。しりゅうだんを片手に、まるで自分がやったと言わんばかりに不敵に微笑んでやがる。

『……千、雨…ちゃん？』

ハッとして、後ろを見た。どこで会ったのか、長瀬を連れて戻ってきていた。

『……まさか、これはお主が？』

違う、私じゃない……

『うそ、だよね……千雨ちゃん…？』

……朝倉の姿はいつの間にか消えている。
状況的には、私のやったように見える。

……このまま、まき絵にまで自殺されたんじゃない。
たまったもんじゃない。
い。

誤解されたまま死なれてたまるか……！

『……ああ、私がやった。私はおまえらのことが前々から大っ嫌い
だったんだよ！おまえらに殺されるくらいなら……私が先に殺して
やるよ』

そういい、直ぐに森に逃げ込んだ。

ちくしょう、やっぱり無理にでも逃げるべきだった。

あいつらの情に触れたばかりに……！

待つてろよ朝倉、あいつらを虫けらみたいに殺したお前を、私は絶対
に許さねえ……！！

後ろを、ちらりと見る…まき絵、私を怨め……私を殺すことを生き
甲斐として、生き抜いてくれ。私は……お前になら、殺されたって

悔いはない。だが、朝倉だけは必ず私が殺して仇を討ってやる……！！

――他人に関わるなんて、面倒だと思ったが、案外悪くないな。

そして、再び時は今に戻る……

『それって、やっぱり変よ。千雨ちゃんはゆーな達の荷物を手に持ってたんだでしょ？食料とかもあるのに、一緒にふつとばすかな？』

『……フム、拙者もそこが気になっていたのでござるよ。食料を詰めようにも、拙者らが戻るまで5分も掛かっておらぬ。時間が足りなさすぎるでござるよ』

『きつと、長谷川さんは犯人を目撃しているはずです。それでもなお、自分が犯人だと告げたのにはきつと訳があるはずです。明日になったら長谷川さんを探して、本人に直接聞くのが1番だと思うのだが、楓達はどうしたいんだ？』

最終的な結論として、やはり本人しか知り得ない気持ちだと思い、二人に尋ねた。

『私は……千雨ちゃんに聞きたい。本当のことを……誰がゆーな達を殺したのか、ちゃんと真実を知りたい』

『拙者は、まき絵殿に付き合つてござるよ。千雨殿の真意も知りた

いであげようし』

『じゃあ、明日になったら千雨ちゃんを捜すってことで決まりね。じゃあ、とりあえず寝ようか』

『では、拙者と刹那で番をする事で構わぬか？』

『ああ、私が先に番をするから、楓は横になっていてくれ。時がきたら起こすよ』

『あい、わかった』

こうして、新たに楓とまき絵さんを加えた私達は、一時の休息をとることにした。

第一夜？（後書き）

女子一番、相坂さよ
女子三番、朝倉和美
女子七番、柿崎美砂
女子八番、神楽坂明日菜
女子九番、春日美空
女子十番、絡操茶々丸
女子十一番、釘宮円
女子十二番、クーフエイ
女子十三番、近衛木乃香
女子十五番、桜咲刹那
女子十六番、佐々木まき絵
女子十七番、椎名桜子
女子十八番、龍宮真名
女子十九番、超鈴音
女子二十番、長瀬楓
女子二十一番、那波千鶴
女子二十二番、鳴滝風香
女子二十三番、鳴滝史伽
女子二十四番、葉加瀬聡美
女子二十五番、長谷川千雨
女子二十六番エヴァンジェリン
女子二十八番、村上夏美
女子三十番、四葉五月
女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り24人、死亡者三名。

女子二番、明石裕奈

朝倉和美の放ったしりゅうだんの爆撃による施設倒壊により、瓦礫の下敷きになっての圧迫死。

女子五番、和泉亜子。

明石裕奈と同上。

女子六番、大河内アキラ。

明石裕奈と同上。

第一夜 終章（前書き）

今回は千雨の独白のようなものになりました。

といっても、前半は少し違います……

しいていうなら、誰だって好きでやってるわけじゃないということです。少しは彼女にも共感していただけたら幸いです。

では、本編をどうぞ。

第一夜 終章

カタカタと、モニターを見ながらパソコンに何かを打つ人物がいる。ブーンという無機質な機械音、換気口のプロペラがそれに反応してくるくと動いている。

『ここまでで、まだ7人が……日時が変わるまで後一時間ほど、せめて10人は死んでもらわないと、こっちの計算が合わなくなるのよね……あの子達、もう少し頑張ってくれないかしら』

フー、と息を吐きパソコンを閉じるのは、鳴浜京子。このゲームの担当官である。

今は自室に籠り、パソコンにゲームのデータバックアップを打ち込んでいる。もし、機械に精通したものがハッキングしてきたとしても、こうしておけばデータが消失することはない。

コンコン、とノックがした。誰だろうと思いい戸をあける。立っているのは今回入ったばかりの新兵だった。
たしか、名を高科たかしなといったかしら。

『何かよう？私は今忙しいんだけど』

『……あの、本当にこのまま続けていてもいいんでしょうか。まだ未来のある彼女達の命を奪う権利なんて、我々にあるのでしょうか？』

『……仕方ないじゃない、選ばれた以上は逃げられないのよ。くだらないこと考えてる暇があったら持ち場に帰りなさい。それと、そ

んな考えさつさと捨てる事ね。でないと、今度は貴方が死ぬ番よ』
冷酷に突き放し、扉を閉めた。去っていく足音を聞きながら、爪を
噛む。ふいに、昔の事を思い出した。

……こんなこと、一体なんの意味があるんですか！！
まだ彼等は中学生ですよ！？まだ若いし、未来だってある。これか
らを生きる彼等を殺す権利なんて、私達にあるんですか！？

あの頃は、私もまだ参加者を憐れむ心があつたっけ……今の彼みた
いに。でも、仕方ないのよ……どんなに怨まれたって、憎まれたっ
て、この世界で生きるためには、こうするしかない。

再び、椅子に座り机の上に飾ってある写真を手にとる。

『生きるためには、こうするしかないの……こんなお母さんでも、
許してくれるよね？亜紀……』

今はもういない、娘の写真を見ながら問い掛けた。

娘は、今より二つ前のゲームで誰かを殺すことを拒み、崖に自らを
投げ出して自殺した。

そう聞かされた夜、これでもかというほど泣いたが、翌日にはまた
政府の役職について仕事をしていた。

死んだ娘の分まで、生きなくてはならないと思ったからだ。

だからこそ、政府には逆らえない……娘と同じ年頃の子達を殺しあ
いさせると言われても、嫌とは言えないのだ。

『……できるだけ、できるだけ早く終わって……！お願いだから……
……』

誰もいない室内で、写真を抱き抱えて、小さくそう呟いた。

所は変わり、再び暗い森の中……長谷川千雨は休まずまだ朝倉和美を探して歩いていた。

途中、女子七番の柿崎、十一番の釘宮、十七番の椎名を見掛けたが、声はかけなかった。

三人とも、こちらには気付いていなかったようだが、風の音一つでもビクリと体を震わせて体を寄せ合わせていた。

あれでは、何の情報も聞けそうにないだろう……流石のおてんばチアガール達も、今の状況ではそれ所ではないんだろうな。無理もないが……

『……にしても、流石に疲れたな。結局仮眠もとれなかったわけだし』

手頃な大木に背を預け、力無く座り込んだ。

辺りを警戒するのは忘れずに、支給されたパンと水で飢えなどをしのぐ。

『ちきしょー……朝倉の奴何処に隠れてやがるんだよ』

三本ある水の内一本を半分まで飲んで愚痴を零した。

なんとしても、誰かが朝倉を殺す前に見つけださなくては……仮に朝倉に殺されたとしても、道連れにしてやる。

そう意気込んでいたのだが、広い森をあてもなく捜すのだから、疲労は溜まる一方だ。

その時、ガサガサと草木を掻き分ける音がした。
思わず身構える……朝倉だろうか？

しかし、出てきたのは小さな子猫だった。

『……なんだよ、猫か。脅かしやがって』

拍子抜けして、手に握った小銃をポケットから取り出す。

『確か、デリンジャーっていったよな。この世で1番小さな銃……
だったか』

こちらに近づいてくる小猫に目をやりながら、再びしまつ。

『なんだよ、お前……野良猫か？あいにく、お前に分けてやれる食料はないんだよ。あっちにいきな』

そう言っても、小猫は近寄ってくる。やがて足元にくると、人懐っこくすりよつてきた。

この島を追い出された島民が飼っていた猫なんだろう、よくみるとスス汚れた赤い首輪が見える。

『仕方ねーな……少しだけだからな？』

甘えてくる小猫に負け、手持ちのパンをちぎって何度か与える。
それを食べると、今度はかまってくれと合図してきた。

『私はお前と遊んでる暇なんかないんだよ、ほら、もういけよ』

少しの休憩をとり、立ち上がる。

小猫には悪いが、もう相手している時間はなかった。軽く手で追っ払い、再び森を歩きだす。

『……………誰かいるのか？』

暫く歩くと、血の臭いが漂い始めた。怪我をしているのか、出血死しているのか……………私は、銃を片手にそちらへ進む。

『……………村上……………』

そこでは、女子二十八番の村上夏美が、その体を横たえていた。首がスッパリと裂けている。

先程の臭いは、ここから漂ってきたんだろう。

ふ、と後ろに気配を感じた。同時に体制を下げ、前に飛び出す。

シュツと言う風切り音を立てて、私のいた場所に農作などで使う鋭い鎌が突き刺さる。

『あら、残念……………外したわ』

『まさか……………那波……………お前が村上を？』

鎌を抜き、目の前に立つ女子二十一番、那波千鶴を見る。

『ええ、夏美ちゃんたら、私を見つけた瞬間駆け寄ってきたの。だから、抱きしめてあげた後に軽く喉元をね？』

再現するかのように、ジェスチャーする。

『……………自分を信用する相手を躊躇いなく殺すなんて、それでも友達

かよ……!』

『私はそのつもりよ?だから、なるべく苦しまないようにして殺してあげたの』

『……悪いが、あんたに殺される予定はないんだよ。私を殺していい奴はすでに決まってるんでね』

ゲームに乗った敵には、こちらも容赦しない。掌に隠したデリンジャー銃で、那波の胸を素早く撃ち抜く。

何がなんだかわからない、という顔をしながら、那波は倒れた。

『……ハハ、これで私も朝倉と同罪か……』

渴いた笑いを零すと、二人の食料を奪い、そのまま傍にある森の外へとでた。

『仕方ねー、朝がきたことだし、今日はここまでにしとくか』

そのままそこに座り、昇ってくる朝日を眺めながら再び軽い食事に入った。

朝日が完全に昇る頃、一日目の終了を告げる放送が入った。

第一夜 終章（後書き）

女子一番、相坂さよ

女子三番、朝倉和美

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十番、絡操茶々丸

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十三番、近衛木乃香

女子十五番、桜咲刹那

女子十六番、佐々木まき絵

女子十七番、椎名桜子

女子十八番、龍宮真名

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十四番、葉加瀬聡美

女子二十五番、長谷川千雨

女子二十六番エヴァンジェリン

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り22名、死亡者2名。

女子二十一番、那波千鶴。

友人、村上夏美を殺害後、やってきた長谷川千雨の所持していた銃

によつて射殺。

女子二十八番、村上夏美。

友人、那波千鶴に出会つても、その直後に喉を鎌で切り裂かれての出血死。

第二夜、始まりの放送（前書き）

今回は少しペースをあげ、三人死んでもらいました。扱いに不満をもたれるかたもいるかもしれませんが、やむおえない事情があるため、ご了承頂けるとうれしいです。

次話ではとうとうあの二人が邂逅します。

はたして、決着がつくまえに刹那達は辿り着けるのでしょうか？
それはまた、次話でのお楽しみです。

第二夜、始まりの放送

……ザ、ザーと朝日が満ちる頃、島全土に放送が入った。

無機質な音を立てるスピーカーから、ふいに担当官、鳴浜京子の声が聞こえた。前夜の弱々しい彼女とは違い、初日刹那達に聞かせたあの声で、死者の名を告げる。

『昨日の時点で、死者は9名……名前は以下の通りよ。雪広あやか、早乙女ハルナ、綾瀬夕映、宮崎のどか、和泉亜子、明石裕奈、大河内アキラ、村上夏美、那波千鶴。なかなかの動きね、でも後二日以内に最後の一人にならないと首輪が爆発するから気をつけてね？では、次に禁止エリアですが……』

『まさか、夏美殿達まで既に死んでいようとは……ここは禁止エリアに含まれておらぬようだが、これからどう動く？刹那』

放送が終わると、禁止エリアを書き込んだ楓が聞いて来た。

まだお嬢様達は眠っているの、今のうちに段取りをしておこうという話になったからだ。

『……そうだな、私が先頭にたち、明日菜さん、お嬢様、まき絵さん、最後に楓の順に歩き、このまま海岸づたいに南、そして西の順に進もうかと思う。今もいるかは分からないが、森で龍宮が待ち構えている可能性は無い、大御所になった今、狙撃される可能性が高いからな』

『フム、となると……一度診療所の跡地を通ることになるでござるな。まき絵殿の気持ちに整理ができておらぬかもしれぬ……少し遠

回りだが、北のルートでは駄目でござるか？』

楓が、少し考えた後に診療所マークを指差していった。確かに、そこを通るのは、まき絵さんにとっては精神的に辛いだろう。

『……そうだな、ここは北のルートを選ぶ。楓、お嬢様達を起こしてきてくれるか？簡単に朝食をとって、日のあるうちに北エリアに入っておきたい』

『あい、わかった』

楓は、そういうと奥の部屋で眠る皆を起こしに行った。

『長谷川さんが無茶をする前に、見つけ出せばいいが……』

地図を見ながら、一人小さく呟いた。

場所は代わり、森の北側……女子二十六番のエヴァンジェリンは、友人であり、自分の思うままに従うガイノイドの女子十番、絡操茶々丸と共にいた。

『このまま順調に回りが死ねば、最終的には私とお前だけになる。そうすれば茶々丸、お前は私のために死んでくれるな？』

『ハイ、マスター……そうすることで、マスターは手を汚す事なくゲームの勝者となることができます』

『そうだろう？ 奴らとはココが違うんだよ、ココがな』

頭を指差して、愉快そうに笑うマスター……

ですが、何故でしょうか。昨夜より生まれたこのノイズは……私は、マスターを楽しませるために作られたガイノイド、すなわちただの心のないロボットにすぎない。

だから、死を恐れる等ないはずなのだが……

『しかし、ハカセはどこにいるんだろうな……お前のメンテナンスをしてもらいたいのだ……が……っ!?!?』

気がつけば、そのマスターの首を締め上げていた。

『ぐ……が……あ……き、貴様……何を、離、せ……私を……殺す……殺す……りか?』

『申し訳ありません、マスター。どうやらバグが見つかったようです……』

心……私にも、自我というものが芽生えたのだろうか。

だとすれば、感情を持たぬはずの私が感情を手に入れた……それはバグでしかないだろう。

私は、ロボットなのだから……

『マスターの代わりに、私が最後まで生き残ります。だから……死んでください』

グ、と力を込めた。

ゴキッ……という鈍い音の後、手を外そうともがいていたマスターの手がダラン、と下にさがった。

『おめでとう、茶々丸……これで自由だね？』

背後で、声がした。

声紋データから、私の産みの親、女子二十四番の葉伽瀬聡美だと判断した。

『でもね、茶々丸……ここをこうしていじるだけで、簡単に茶々丸を壊せるんだよ？』

背後から、茶々丸の生命線とも呼べるコードをいじり、それを切断した。機能が低下し、やがて茶々丸はその場に崩れ落ちるようになった。

『危険因子の排除成功……次は龍宮さんあたりで、も……？』

音もなく、それは私の額を貫いていった。脳内で弾が爆ぜ、一瞬で私の意識を奪っていった……

少し離れた位置で、龍宮はライフルを構えた。本当はエヴァンジェリンを仕留めるつもりだったのだが、この際それは関係なかった。なぜなら、彼女は標準の向こうで、たった今殺されたのだから。

『さて……次は刹那達でも探すかな。昨日の御礼はさせてもらわないとな』

素早く支度して、私はその場を離れた。

更に場所は代わり……今度は千雨が捜し求めている女子三番、朝倉和美にスポットを当てる。

誰かから奪ったのか、はたまたそれが自分の支給武器だったのかは定かではないが、今彼女は日本刀を持っていた。

『やつぱり、これが一番落ち着くね……さよちゃんから借りたしりゅうだん、おっかなくなつて使えないよ。それ一つで、建物が一つ破壊できるし』

私は、苦笑いしながら女子一番、相坂さよの持つしりゅうだんに目をやる。まあ、彼女には誰もいないのを確認したと嘘をついているが……

『本当に、誰も殺してませんよね？』

放送を聞いてから、何度も同じことを聞いてくる。

この嘘も、いつまで隠しておけるやら……

そう思っていた矢先、ちうちちゃんが茂みから現れた。

『……見つけたぞ、朝倉』

第二夜、始まりの放送（後書き）

女子一番、相坂さよ

女子三番、朝倉和美

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十三番、近衛木乃香

女子十五番、桜咲刹那

女子十六番、佐々木まき絵

女子十七番、椎名桜子

女子十八番、龍宮真名

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り19名。死亡者、三名。

女子十番、絡操茶々丸。

生命コードを葉伽瀬に切断され、機能停止。
事実上の死を迎える。

女子二十六番、エヴァンジェリン。

ガイノイド、茶々丸の手により、首の骨を折られて死亡。

女子二十四番、葉加瀬聡美。

茶々丸を殺害後、エヴァンジェリンを狙っていた龍宮に頭部を銃で貫かれて死亡。

第二夜？（前書き）

朝倉の狂気は止まらない、生き残るために他人を犠牲にすることを選んだ彼女が行き着く先はなんなのか……森を縄張りとする龍宮はこの場にも現れるのか……それはまた次話以降にて明かしていきたいと思います。

でも、そのうち刹那が死ぬことだけは確定しています。むしろ近いかな……まあ、とりあえず本編をどうぞ！

第二夜？

朝食をすませて、海岸沿いに北に向かって歩いた。

今日こそ、朝倉を見つけて復讐してやる……！そう決意を新たに歩いていけると、森の中にボロボロの家屋を見つけた。

家屋といっても錆びれ果てており、屋根こそあるものの、それ以外はないに等しかった。

もしかしたらと慎重に様子を伺えば、相坂と話をしているアイツの姿がそこにあつた。私は、すぐに茂みをわけ、二人の前に姿を現す。もちろん、銃は掌に隠し持って

『あらら、もう見つかったか……ちうちちゃん、見つけるの上手いね』

朝倉は、平然と構えている。だが、その手に握られた刃の先は間違はなく相坂に向けられている。近づけば、殺すというわけか……

『その名で私を呼ぶんじゃない！……先に聞いておきたい、なんで和泉達を殺した？』

『え……朝倉さん、殺したって……どういふ』

その瞬間、相坂の首から血が噴き出した。

なんのためらいもなく、朝倉が手持ちの刀で相坂の首を斬り裂いたからだ。

『……あーあ、ちうちちゃんのせいだからね？さよちゃんが死んだのは』

刀の血を振り払いながら立ち上がる。もはや、理性うんぬんの話じゃねーな……こいつ、狂ってやがる。

『ちうちゃんが余計な事言うから……さよちゃん、殺しちゃったじゃないか。弾避けくらいにはなると思ってたのにな……』

口元を吊り上げて、妖艶に笑う。もはや、学校にいたころの朝倉とは別人になっている。

ヤバイな……ここまで人って狂えるもんなのかよ……

『……ハ、いつそ私もお前みたいに狂えたら楽になれるのかもな？だが、どちらにせよ……私は、朝倉……お前を許せねえ、ここで殺してやるよ』

『……まさか、ちうちゃんが誰かのために復讐しようなんて考えるタイプだったなんてねえ、私も驚いたよ。学校じゃ、自分の世界から出て誰かに干渉するなんてしなかったじゃん。こういう風のふきまわしかな？』

刀を構えながら、緩く首を傾げる。これが、私が最初に目指していた誰かを殺してでも生き残ってやる。って姿なのか……？最悪だな……、冷静に見れば、憐れみさえ感じちまう。

『初めは、私の世界さえ護られればそれでいいと思ったよ。だがな、大河内が気付かせてくれたんだ、そんなもん無意味なんだってな。数分しか一緒にいなかったが、こんな私でも受け入れようとしてくれた。……だからこそ、私はお前が許せねえんだよ……！！』

銃の引き金を引く、しかしぶれてしまい朝倉に当たる所か検討外れな方向に飛んでいった。

『銃なんて、そんな扱いにくいの使う時点で、ちゅちゃんは私には勝てないんだよ……』

構えた刀を振り上げて迫ってくる。間一髪でそれをかわし、広い場所に出ようと、素早くダッシュした。

『私を殺すって発言したわりには逃げるんだね……ちゅちゃん、臆病なんだ？』

刀を振り回しながら、朝倉が追ってくる。なんとかそれをかわしながら反撃するが、動きながらじゃなかなか当たりやしねえ……二発ほど肩を貫通したが、朝倉は気にした様子もなく刀を振り回す。おいおい、弾が当たってるんだぞ。なんでダメージおわねえんだよ……！段々、焦りが生じてくる。弾は確かに当たってる……なのに、まるでバイオハザードのゾンビよろしくどこ吹く風で迫ってくる。頭でも吹っ飛ばしてやればいいんだろうが、落ち着いてそれができるような状況でもない。

『あ、やべ……っ！』

足がもつれて、その場に倒れ込む。

起き上がろうとした目の前に、刀の先が向けられる。

『……あっけなかったね、ちゅちゃん？バイバイ』

ヒュン……ツと、刀が振り下ろされた。

ちくしょう……仇をとるつもりでいたのに、私はなにもしなかった……まき絵、すまねえ。お前に殺されてやれなくて……自分の無力さを痛感しながら、私は固く目をつむる。

……ん？

おかしいな。首が跳ねられる感覚がしねえ……？
なんでだろう？と、目を開けると……

時は再び遡る、千雨が朝倉の猛攻を避けながら逃げていた先は、調度明日菜や楓らの一行が目指す北の方角だった。

彼女達は、千雨を探して辺りを見渡しながら歩いていた。

『千雨ちゃん、おらへんなあ……どこにおるんやろ』

『こうも広いとき、特定の人を見つけるなんて難しいわよね……まきちゃん、うっかり禁止エリアに踏み込まないでよ？』

『そこまでドジじゃないよ私！……アスナじゃないんだから』

と、さつきからずつとこの調子である。もう少し緊張感を持つてほしいのだが……と、刹那は一人苦笑いをしながら先頭を歩いている。ふいに、後方にいた楓が立ち止まる。
森の一角をみているようだが……

『刹那、見つけたでござるよ……！』

言うが早いか、森に駆け込んでいった。私も状況を把握し、お嬢様達と後に続く。

そして、再び時が動き出す。振り下ろされた刀を、楓はすんでの所で食い止めた。

『……………お、お前……………長瀬……………!?.』

驚いた、私の目の前にたち、私の命を救った相手が、ゲームに乗ったと宣言したはずの長瀬だったのだから。

『……………間に合ってよかったでござるよ、千雨殿。怪我はないでござるか?』

『あ……………ああ……………』

聞きたいことは沢山ある、何故助けるのかとか、何故ここにいいのかとか……………しかし、今は状況が状況だ。素早く立ち上がり、距離をとった。

『……………お仲間か、ますます普段のちうちゃんとは大違いだね。スクープになりそうだよ』

クスリ、と楽しげに朝倉が笑う。その笑みに、私は体の芯からゾクリと恐怖を感じた。

第二夜？（後書き）

女子三番、朝倉和美

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十番、絡操茶々丸

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十三番、近衛木乃香

女子十五番、桜咲刹那

女子十六番、佐々木まき絵

女子十七番、椎名桜子

女子十八番、龍宮真名

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十四番、葉加瀬聡美

女子二十五番、長谷川千雨

女子二十六番エヴァンジェリン

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り21名。死亡者、一名。

女子一番、相坂さよ。

友人、朝倉和美の所持していた日本刀で喉を斬り裂かれての出血死。

第二夜？（前書き）

前回のあとがきに間違いがありました。

今回のあとがきがただししいものになります。

さて、本編ですが……きっと彼女ならこうすると思いました。とだけ言っておきます。

では、本編をどうぞ

第二夜？

『楓、無事か！？』

楓から遅れること数分、お嬢様達を連れてようやくたどり着いた。そこで見たのは、刀を構える朝倉さんとブラックテイルと呼ばれるタイプのハンドガンを二丁構える楓、その背後に立つ傷ついた長谷川さんの姿だった。

場は緊張に包まれている。

誰も動けない……そつとお嬢様達の様子を伺った。朝倉さんのその姿に驚いているように見えた。無理もない……時たま無茶な行動に出るが、朝倉さんはトラブルメーカーでもありながらクラスのマードメーカーでもあったのだ。

ゲームに乗るタイプではない……はずである。

しかし、事実彼女は私達にその刃を向けている。人とは……これほどまでに変わってしまうものなのか……

『……ハ、まったく次から次へと、そんな大御所で、一体何するつもりなのさ？あ、それとも集団自殺でもしてくれるのかな？』

助かるなあ……なんて、口元を緩めながら朝倉が言う。

じょーだんじゃねえ、自殺するために私は昨日を生き抜いたんじゃねえ。私は……まき絵に殺される、もしくはその罪を背負って生き続ける。

そう決めたんだ……！

『……長瀬、敵にいつまで背を向けてるつもりだよ。私だって……おまえの敵なんだぜ……！』

下げていた銃を長瀬に向ける。
今撃てば、確実に長瀬を殺せるだろう。
だが……

『ほらね、結局助けたって裏切られるんじゃない。流石はバカブル
ー……おバカらしい最後だったね』
クスリ、と朝倉が笑みを見せる。

なに笑ってやがるんだか……よく銃口の先を見やがれてんだ。

『だが、まずは朝倉……てめえからだ!!』

長瀬達の登場で、冷静に頭が働くようになった。だからこそ……的確に朝倉の頭部を狙う。

ターミネーターじゃねえんだ、今度こそ確実に殺せる。
そう確信して、引き金を引いた。

『千雨ちゃん……ダメー……っ!!』

長瀬の脇から、朝倉を狙ったその弾は……飛び出してきたまき絵の腹部を貫き、その威力を殺して肝心の相手に届かなかった。
緊張のとけたその場所に、まき絵が倒れる。

啞然とした朝倉、茫然と立つ長瀬達、そして……

『……ば、ばかやろっ!!なんでこんなやつ庇ったんだ。こいつは和泉達を……!』

銃を捨てて、慌てて駆け寄る。

抱え起こして、大声で怒鳴った。だが、全部言い切れずに弱々しく

笑つまき絵に人差し指を口元に当てられた。

『……わかってたよ、千雨ちゃん、ゆーな達を殺、し……たんじや……ないっ……て、事……くらい……仇、とろうとして……くれたんだよね？でも、ダメだよ……どんな事情があっても……誰かを殺すなんて……絶対……ダメ……そんなんじゃ……』

ゴホゴホと、血が口から溢れてくる。

お腹も、どんどん滲んでくる……私、このまま死ぬんだ……でも、これだけは千雨ちゃんに伝えなきゃ……最後の力を振り絞って、言葉を繋げた。

『千雨ちゃんも、朝倉と同じになっちゃう……それって、かなしいよ……』

意識が薄れてきた、もう……千雨ちゃんの顔もぼやけて見えないや。でも、そのかわりに死んだゆーな達が、私を迎えに来てくれたような気がした……

『……ばかやろう、もう……遅いんだよ。私は既に那波を殺してるんだぞ？今更、戻れやしねえんだよ……』

ふざけるな……私は、死ぬときはお前に殺されて死ぬつもりだったんだ……なのに、何でお前が先に死んじまうんだよ……しかも、朝倉なんか庇いやがって……！！

『……あーあ、何か拍子抜けしちゃったな。状況的に見てもこつちが不利だし……一先ず殺さないであげる。ちうちゃん、まき絵に感謝しなよ？殺されずにすんだんだからさ』

……ふざけんな……ふざけんな……ふざけんな……っ！！
まき絵の死に動揺した長瀬から銃を奪い、躊躇わずに逃げようと背を向けた朝倉目掛けて撃つ、弾が無くなるまでひたすら撃った。肩で息をする頃には、朝倉はその場に倒れ、ぴくりとも動かなくなっていた。

『千雨ちゃん……』

神楽坂の声に、ビクリと反応して身をひるがえす。

そこで頭が冷え、すぐに長瀬の銃を放り投げ、自分の銃を取りに行く。

ちらりと、まき絵の死に顔をみる。

『……せめてもの手向けだ、仇はとったぜ。……じゃあな、助けてくれた礼もある。今はやりあつつもりはねーが、次会った時、私はお前らの敵だからな』

『待つてーな、千雨ちゃん！うちらと一緒に』

『甘えてんじゃねえっ！！私は誓ったんだ、死ぬ時はまき絵に殺されるってな。それが無理なら……お前ら全員の命背負って生き抜いてやるって。もう……馴れ合うのは御免だ……じゃあな』

ピシヤリ……と近衛の言葉を遮り、私はその場を去った。

そうだ……もう、馴れ合って弱くなるのはごめんだ……私は、私の世界を守る……もう誰にも、心は許さねえ……！！

- - - まき絵：お前、やっぱりバカだよ。

でもな、そんなお前でも……嫌いじゃなかったぜ。

だからこそ、お前の代わりに優勝して私が生き残ってやるよ。そう
心の中で呟きながら、私はその場を去った。

まさか、あの後もうひと波乱あの場所で起こってたなんて、後で知
るまで私にわかるはずもなかった。

第二夜？（後書き）

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフェイ

女子十三番、近衛木乃香

女子十五番、桜咲刹那

女子十七番、椎名桜子

女子十八番、龍宮真名

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り16名。死亡者、二名。

女子三番、朝倉和美。

怒りに身を任せた長谷川千雨の手により、長瀬楓の所持していた銃に撃ち抜かれて死亡。

女子十六番、佐々木まき絵。

長谷川千雨の所持していた銃から発射された弾から朝倉和美を庇い、

その弾を喰らったことによる出血死。

第二夜？（前書き）

まき絵の死により、この回にて楓は一時メンバーより外れます。

蛇足ながらに説明を。

楓の探し人のふーちゃん、ふみちゃんとは分かっているとは思いますが、鳴滝姉妹の事です。

まあ、彼女達三人が生きて合流できるかは……まだ未定ですが。

次回よりあの二人の戦いに触れていきたいと思えます。

改めて、今後とも見捨てずよろしくお願いします。

第二夜？

長谷川千雨が去ってから数分、残されたメンバーはその場にまだ留まっていた。

先程亡くなつた佐々木まき絵は、今はすぐ傍にある大木の下で手を組んだ状態で安置されている。その顔は、どこか安らかでまるで笑みを浮かべているようだった。

『……………これから、どうしようか？』

誰に聞くでもなく、明日菜が呟く。

ハルナの死を止められなかったばかりか、すぐ目の前でまた友人を死なせてしまった。

刹那達に出会い、幾分かの元気を取り戻していた明日菜だったが、ここにきて再び活力を失いつつあった。

『……………拙者、探し人がいるので一時離れても構わぬか？』

暫くの沈黙のあと、楓さんが立ち上がった。

『もしかして、ふーちゃんとふみちゃん……………探しにいくん？せやつたら、うちらも一緒に行くえ？』

もう嫌や……………

……………これ以上、大切な友達と離れるんは……………そんな目で楓さんを見た。せやけど、言いくそうに口ごもって目をそらした。

『……………いや、すまぬが今は一人にして貰えぬか。……………これ以上、

誰かの犠牲を見るのは辛い…。しかし、代わりに必ず約束するでござるよ。必ずまた合流する……そして、共に逃げ切る方法を探すでござるよ』

それまで、どうか生き抜くでござる。と、最後に言い残して楓はその場を離れていった。

『また、三人に戻りましたね……これからどうしましょうか？』

『……仲間を探すつてさ、難しいよね。どっちかといえば、仲のいいクラスだったはずなのにさ。いざこういう状況になったら、皆自分のことばかりで……誰かを信じるつてさ、そんなに難しいものなのかな？』

自嘲気味に明日菜さんが呟いた。

確かに、人とは弱くもろい生き物だ。

人を信じるとは、簡単であって実は難しい事。

裏切られたり、何かを失ったりすればなんでもいいからすがりたくなる。神や宗教がその対象だろう。

無論、私はそれらを馬鹿にするつもりはないのだが……それらによつて、人は安心というものを得られるのだから。

しかし、それでもこのゲームにおいては信じる事を忘れるべきではない。それこそ、政府の思うつぼだ。

『そう言わずに、もう少し頑張らしましょう。私達まで信じる事をやめてしまえば、それこそ助かる道は見い出せません』

『……面白いことをいう、刹那。君は正気かい？』

ふいに、龍宮の声が森に響いた。

『よもや、このゲームから生きて複数で帰ろうなどと考えているのかい？首輪のシステムはどうする、回りを囲む政府はどうする、できないことをするより、生きる為に犠牲を払う方が利口だと思うけどね』

再び、龍宮の声が響く。確かに、問題は山積みだろう……しかし、それでも諦めたくはない。

あがくことなら、誰にだってできる。

ならば、死ぬその瞬間まで諦める訳にはいかない。お嬢様をお護りする、それが私の使命……！

『龍宮……姿を見せろ！お前がここに現れたということはお嬢様や明日菜さん、私を殺しにきたんだろう？……お嬢様の命を奪うというのなら、私は、たとえ旧知の仲である龍宮とて……容赦はしない』

ずっと、懷にしまっていた短刀を手に握る。

……決意はできた……佐々木さん、すみません。

私も、長谷川さんと同様に貴女の願いには答えられそうにもありません。

ですが、私の振るう剣は誰かを護るため……むやみに殺めるつもりはありません。それだけは、今この場で貴女に誓います。

だからどうか、私にお嬢様達を護れるだけの力を貸してください……

…

第二夜？（後書き）

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十三番、近衛木乃香

女子十五番、桜咲刹那

女子十七番、椎名桜子

女子十八番、龍宮真名

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り16名。死亡者、0名。

第二夜？（前書き）

いかにも、彼女らしい最後にできたかと思っています。

はたして、彼女は刹那の気持ちを汲み取れるのでしょうか……それはまた、少し先の話です。

では、本編へどうぞ。

第二夜？

『いいだろう、これから死に行く友人に最後の手向けだ』

その声と共に、前方の木々の隙間から龍宮が姿を見せた。

『もう一度だけ聞く、龍宮…お前ほどの実力者が、なぜおとなしくゲームに参加する！？』

『くどいぞ、刹那…前にも言っただろう？これは仕事と同じだと』

『…どうしても、ダメなのか？』

『くどいぞ、なんと同じことを言わせるつもりだ。ごたくはいいからかかってこい。特別にこちらもナイフで相手しよう』

どうせ、今銃は手元にないしね。時限仕掛けを施し、いつでも近衛を狙えるようにしてある。

それに、刹那…君とはまだ本気で戦ったこともない。いい機会だ…私が勝たせてもらおうよ。

『せつちゃん……』

『大丈夫です、お嬢様……必ずお護りしますから』

不安気なお嬢様に振り返り、笑みを見せた。

同時に、向かってくる龍宮のナイフをかわし、素早く距離をとる。鞘から短刀を抜き取り、龍宮に陽動として投げる。

その後、直ぐに飛び上がり、腰に差していた愛刀、夕凧を抜く。

『神鳴流……雷鳴剣！』

夕風に雷を宿し、龍宮目掛けて降り下ろす……が、避けられた。

『驚いたな、夕風は政府に没収されてるものだと思っていたんだが……それは不公平じゃないか？君は初めから強力な武器を持っているわけだから』

まあ、刹那に使わせればデッキブラシだろうがその辺に転がる木の棒だろうが刀のそれとは大差ないだろうが。

『私も驚いたよ、まさか使用武器として残っていた時は。どうやら私は政府のお偉方に一枚買われているようだ』

『まあ、私も人の事は言えんが……私の愛用するライフル銃も、手付かずで残されていたよ』

……？

なら、なぜわざわざ接近戦を仕掛けてきたんだ？愛銃を、龍宮がわざと使わない理由……まさか！？
ハッとなり、お嬢様の方を向く。

今のわずかなやりとりだけで、距離を空けられてしまっていた。

『だからこそ、こういうやりかたも出来るんだよ。刹那』

近くに設置した、細いテグスを手に掴み、それを引いた。
先はライフルの発射装置に通じていて、弾の代わりにボウガンの矢が飛ぶようにセットしてある。

『お嬢様っ……！！』

無駄だよ刹那、今から走った所で間に合わないさ。矢の速度を、人が越えられるわけがない。

すべては私の作戦勝ち……の、はずだった。

『お嬢様……お怪我はありませんか……？』

『せつ……ちゃ……なんで？』

『何を言ってるんですか、貴女をお護りするのが私の役目……これくらい、かすり傷です』

腹部に深々と刺さった矢を引き抜く。

直ぐに血が滲んできたが、そんなものは構わなかった。

ただ、卑怯にも私の相手をしながらお嬢様を狙った龍宮にはもはや怒りしかなかった。

戻ろうとする私の足に、お嬢様がしがみつく。

『も、もおええ……逃げよ？せつちゃん。逃げて逃げて、どこでもええ……治療できるとこまでいこ？な？』

そんなお嬢様の手を外し、笑みを見せる。

……意識が遠退く、毒の回りが早いようだ。

『……明日菜さん、お嬢様を、お願いしますね』

それは、柔らかな笑みだった。だけど、そんな刹那さんの顔は、何処か悲しみを帯びていて、まるでもう自分は助からないみたいと言

い方だった。

近衛を振り払い、刹那がこちらに戻ってくる。

あの様子だと、即効性の毒矢だということに気付いたか。どちらにせよ、やはり君はいい……流石は私の好敵手だ。

『まさか、あの距離を一瞬の内に移動できるとは思わなかったよ。正直驚いた』

『……ごたくはいい、消える。私の理性があるうちに、逃げなければ、龍宮……お前は殺す』

同時に、ス……と目の前にいた刹那が、まるで蜃気楼のごとく消える。

『神鳴流……』

すぐ真横で、刹那の声が聞こえた。

『水鳴剣、映し身』

スパッと、刀が体をよぎる。腰を深く斬られたらしい。同時に吹き出た血が、刹那の体にかかった。

『……水鳴剣は、雷鳴剣とは違い水を宿し、蜃気楼で相手を攪乱……す、る……龍宮、これ、で……』

息も絶え絶えに、刹那が先に倒れた。額から大量の汗を流し、体が痙攣してきている。

そこで、私もようやく倒れる。

『フ、フフ……まさか、相打ちになるとはね。刹那、君を敵に回すところも恐ろしいとは……』

正直、私もはじめは刹那と同じころざしを持っていた。
しかし、それを捨ててしまった。

もし、この首輪さえなければ、私も君と同じ道を歩めたのかもしれないな……刹那。

『不思議だ、今は……安らかな気持ちだよ。とても……清々し、い』

――楓、君との勝負はどうやらお預けになりそうだ。

もし、君がこちらに来ることがあるならば、その時には是非とも決着をつけたいものだな。

そんなことを考えながら、私は深い眠りについた。

『……ん……せ……ちゃ……せつちゃんっ……!!』

少しの間、意識を失っていたらしい。ようやくはつきりお嬢様の声が聞こえてきた。

目を開ければ、明日菜さんも不安気な顔を見せる。

『……お、嬢様……明日菜……さん……すみません』

毒が、体を廻る……きつと、長くはないだろう。
すぐに、お嬢様の声が響く。

『喋ったらあかん！……喋らんといて……』

『……すみません、お嬢様。私は、もう長くはないみたいです……ですが、最後まで、貴女の傍にいられた事が何よりの、幸せです』

『……せつちゃん、ごめんな……うちを庇ったばかりに……うち、いつもせつちゃんに護ってもらってばかりで……』

そつと、刹那さんたちから離れる。最後まで二人きりにさせてあげよう。そう思ったから……でも、そうするべきじゃなかったよね？きつと。

『そんなことはありません、お嬢様……貴女がいてくれたからこそ、私は頑張つてこられたんです。お嬢様にお仕えできたことは……私にとって、なによりの……そして最高の、思い出です』

『せつ、ちゃ……』

頬に触れられていた掌が、力なく地に落ちた。

言葉がでえへん、なんや……胸ん中にぽっかり穴ができたみたいや。不思議やな、涙がでてけえへん……一番大事な人が死んだのに、泣くことすらでけへんのかな……？

そつと、傍らに転がった夕風に手をやる。

それを、首元に持ってきたとこで、席をはずしていたアスナが帰ってきた。

第二夜？（後書き）

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十三番、近衛木乃香

女子十七番、椎名桜子

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデ

残り14名。死亡者、二名。

女子十八番、龍宮真名

。

桜咲刹那の所持する夕風に、腰を斬られたことによる出血死。
刹那と相討ちになる。

女子十五番、桜咲刹那

。

龍宮真名の仕掛けから近衛木乃香を護った際に毒矢を腹部に受け、

その毒が全身を回り死亡。

第二夜？（前書き）

更新遅れてすみません、なかなか難しくて……やっと自分の中では納得できる展開に仕上がりました。

残るも僅かになってきました、終わりの近いかもしれませんが……未だ優勝者を出すのかさえも決めかねています。

……リクエストとか、ありますか？

では、とりあえず本編へどうぞ。

第二夜？

話は、龍宮が刹那達と対峙した辺りまで遡る。

森の片隅、位置でいうならばかつて一波乱あつた診療所のすぐ近くといったところだ。

前回いた場所が禁止エリアになり、ここまで移動してきたのは、チアリーディング部の柿崎、釘宮、椎名の三名。

出る時間がバラバラだったのにも関わらず、学校の近くに隠れていた柿崎が呼び止め、今にいたる。

『……ねえ、円……いまつて、何時くらいかな？』

すっかりやる気をなくし、氣力を失いつつある椎名が釘宮の肩によりかかりながら聞いた。

『もうすぐ二日目のお昼つてとこかな、……美砂…桜子…私さ、やっぱり今でも二人を殺してまで生きたいって、思えないんだよね。だからさ…もし、私達が最後に残ったら…どちらかが生き残る為に、私を殺してくれないかな？』

親友だからこそ、私には二人を殺せない。でも、三人一緒に死ぬなんて……それは嫌。
生き残れるチャンスがあるんなら、二人のどちらかには生きて欲しい。

その為なら、私は死んでも構わない。そういう願いも込めて、少し迷ったけど、二人に言った。

『…………円のそういうとこ、私好きだよ？でも、そこまでして生きていたくないよ。円が死ぬんなら、私達だって一緒……ね、桜子』

『うん、それに優勝者が決まらないってさ……向こうにちょっとした仕返しになると思うんだよね？』

ありがと、円……でも、私決めたんだ。二人が待っていてくれた時、死ぬも生きるも絶対一緒だって。

だって、円も、美砂も……かけがえのない親友だから。

『…………ほんと、バカよね。あんた達ってさ』

願い、叶わず……か。

でも嬉しいよ、そういつてくれて……困ったような顔で、言葉を紡ぐ。

ふ、と誰かの気配を感じたような気がした。

森が風でざわつく、その合間をぬって誰かが近づく足音がする。

しかし、それはこちらに気付かずに離れていった。

『ザジ……さん？だよね、今の』

椎名が様子を伺う、どうやら通りすぎたのは三十一番のザジだったようだ。

『あの無口な子か……ゲームに乗ったのかな？』

『どうだろ、桜子……何か武器持ってなかった？』

それぞれ、感想を言い見た本人に尋ねてみる。

『うっん、特に何も。でも、何かを埋めていたような……』

曖昧な記憶を辿ってみる。確かにしゃがんでその様な仕草はしていた、けれど何をやっていたかまでは分からなかった。

それから、禁止エリアになった場合どう動くかの話になったので三人で地図をみながら相談することにした。

そして、再び現在へと戻ってくる。

『この、か…？何やってるの…？』

少し席をはずし、帰ってきた私の目には今まさに後追い自殺しようとしているこのかの姿があった。

困惑した様子を見ると、私が帰る前に自殺するつもりだったみたいだ。目を合わそうとしない……

『…………ごめんなあ、アスナ。うち、せっちゃんのおらん世界では生きていかれへんみたいや…………せやから、うちも向こうに逝こう思っ
うんよ』

『待つてよ、じゃあ…………残された私はどうしたらいいのよ？刹那さんの気持ちは…？死んだ刹那さんなら、きっとこのかに生きて欲しいって思っはず…………だから、もう少しだけ、一緒に頑張ろう？』

そう言いながら、距離を縮めていく。お願いだから、自殺なんてしないで…！

このかを護って、死んだ刹那さんの為にも。そんな願いは、虚しく空を切るだけだった。

『ごめんな、アスナ……アスナは、うちみたいなバカな事、せんでね？うちの分も……絶対生きてな』

……サク、擬音にして出すならまさにそんな感じで刹那さんの刀はこのかの喉元を通過していった。

後、ほんの少しで刀に届くはずだったその手の中に、このかの体が崩れ落ちてくる。

『……ちよ、このか……笑えない冗談はやめてよ……？ね、冗談なんでしょ？……なんでよ……このか……なん、で……私、これからどうしたらいいのよ……！』

……刹那さんを失って、辛いのはこのか……貴女だけじゃないんだよ？

私だって、辛いんだから……でも、このかがいてくれればまだ生きられる。そう思ってたのに……なのに、なんでアンタは先に逝っちゃうのよ。

血こそ流れていなくても、体はだんだん冷えて生気を失ってくる。私は、そんなこのかの体を抱き締めて、初めてたくさん泣いた。その涙は、まるでダムが決壊したかのように止まるところを見い出せずにはいた……

「……ごめんな、アスナ……ほんまにごめん。でも、せつちゃんを失ってしまったら、うちはうちでおられんようになるんよ。」

子供の時からずっと一緒に過ごしてきたせつちゃんとうちは、一心同体……コインの裏表みたいに、離れられへん存在やから。

どちらかがおらんくなったら、残された方は狂ってしまっくんよ……そうなったらきつと、アスナも殺してしまう……そんなん、うち嫌やわ。

親友を手にかけてくれないからこそ、うちは先に逝くね。

だからどうか……アスナ、貴女は生き残って、うちの分も歩いていてください。

それが、うちの最初で最後の我が儘や……

時同じくして、島の灯台付近までやってきたのは先程刹那らと別れた長瀬楓だった。

辺りを見渡してみる、しかし、探し人である鳴滝風香もその妹である史伽も見付からなかった。

『二人とも、まだ生きてるとよいのでござるが……』

可愛い妹ぶんである二人の身を案ずる。生きているならば、なんとかとも傍にいてやりたい……そう思い灯台を調べようと足を向ける、がその足はすぐに止まることになる。

お昼の放送が入ったのだ。

『……それから、龍宮真名さんに桜咲刹那さん、近衛木乃香さんね。』

順調に来ているわ。この分だと三日もかからないんじゃないかしら？じゃ、次は禁止エリアね……今から一時間後に』

そこから先は、頭に入らなかった。

……死んだ？

刹那と木乃香殿が？

何故……？

つい先ほどまでは生きていた……よもや、明日菜殿が裏切ったのでは？

など、頭が一気に混乱してきた。

恐らく、今の拙者なら誰でも殺せるだろう程に、周りが見えなくなっていた……そして、歩き疲れたのか、はたまた太陽に当たりすぎたからか、拙者は灯台を前にしてふ、と意識を失ってしまった。

第二夜？（後書き）

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフェイ

女子十七番、椎名桜子

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデー

残り13名。死亡者、一名。

女子十三番、近衛木乃香。無二の親友である桜咲刹那の死のショックから、もう一人の親友、明日菜の説得虚しく刹那の所持していた夕凧を使って喉を貫き、後追い自殺。

第二夜？（前書き）

更新に少し間があきました、おそらく読者離れもしているでしょう、才能がないことは重々承知してますので。

今回は再び短いですが、まだ読んでくれる方がいらっしやれば幸いです。

では、本編へどうぞ。

第二夜？

『……後はまき絵を連れてくるだけか……急がねえと禁止エリアになっちまうな』

神楽坂達と別れた後、私は再び診療所の跡地にきていた。

理由はただひとつ、私を変えてくれた彼女達をいつまでも瓦礫の下敷きにしていたくなかったからだ。

思っていたより瓦礫の撤去に時間がかかってしまい、三人を運び出す頃には、まき絵の遺体がある場所が禁止エリアになるまで二十分程度しかなかった。

ガサガサと草を掻き分けてようやくあの場所まで戻ってきた。

何があったのかは知らねえが、未だに神楽坂はその場に留まっていたらしい。近衛の遺体を抱き締めるようにして茫然としている。

ま、神楽坂がどうなるうが今の私には関係のないことだ。

……だが

『……神楽坂、お前が何考えてるかなんてわかんねえし、ここで何があったかも知らねえが、みすみす死ぬくらいなら、あがいたほうがいいんじゃないか？それが、近衛達の弔いにもなるだろうよ』

まき絵の腕を肩に回し、支えながらそれとなく言ってみた。

『……千雨ちゃん……このかね、自殺したの。私の目の前で……刹那さんが死んだから、自分も死ぬって……私、何もできなかった、このかを助けることも、刹那さんを助けることも……』

涙は、もう枯れていた。今の私にあるのは親友を助けられなかった

虚しさと自分のふがいなさ、それと——絶望というあの暗い闇、生きる希望なんて、もう見い出せないほどに暗く淀んだ、深い闇……

『……それだけでだいたいの事情はわかった、でもな、残された奴には、死んだ奴の分まで生きる必要があると思うぞ。親友ならなおさらだ』

- - - それでもなお、死にたいというんなら勝手にしろ。私としても……見知った相手を殺すのは、気が引けるからな……

『……………』

- - - アスナは、うちみたいなバカな事、せんでね？うちの分も……絶対生きてな。

- - - 残された奴には、死んだ奴の分まで生きる必要があると思うぞ。

このかの言葉と、千雨ちゃんの言葉が蘇る。

……そうだよな、このか。

このかや刹那さんがやろうとしていたこと、私がやるべきだよな？そうと決まれば、と氣力を奮いたたせ立ち上がる。
このかと刹那さんを寄り添わせ、手を握りあわせる。

『まずは楓ちゃんを探そう、それが一番ね』

そう考え、禁止エリアになるまえにこの場を離れようとした私の前に、ある人物が現れた。

『……………貴女は、生きたい？それとも……………逝きたい？』

『……………え？』

場面は代わり、ここは灯台……………その中にある一室には、外で意識を失ったはずの楓が眠っていた。
傍らに、誰かがいる……………看病に疲れたのだろう、スヤスヤと寝息をたてていた。

ほどよくして、楓が目を覚ます。

『……………此处は……………？拙者は、いつたい……………』

かぶりを振って、いまの状況を認識する。

『そうであった、刹那達が死んだと聞いて、不覚にも倒れて……………史伽殿…！？』

頭がはつきりしてきたことで、ようやく傍らに眠る少女の姿を認識した。それは、まぎれもなく自分の探し人、女子二十三番の鳴滝史伽だった。

第二夜？（後書き）

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子九番、春日美空

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十七番、椎名桜子

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデー

残り13名。死亡者、0名。

第二夜？（前書き）

先にお伝えします明日菜の出番は、少し後になります。

対峙した誰かとその後どうなったのか分かるまで暫しお待ち下さい。

それでは本編をどうぞ。

第二夜？

彼女がここにいるということは、姉である風香殿も此処に…？
そう思い、辺りを見渡してみた。

何てことはない室内で、物があまり置かれていないからかして少し寂しいように感じられた。

楓はそつとベッドから抜け出し、室内を歩いてみる。

危害が及ぶようなものはないようだ、今度は窓に近づいてみる。
外の景色を見ると、どうやら調べようとしていた灯台の中らしいことがわかる。

改めて室内を見渡してみる。依然眠りにについている史伽に近づき、そつと頭を撫でた。

よかった、無事でいてくれた……ホッとしたからかして、自然に口元が緩む。

ふいに、カチャリとロックを外す音がしてドアが開いた。
ひょこつと顔を出したのは双子の片割れ、鳴滝風香だった。

『ああ、楓姉起きたんだ？』

ふみかは？と近寄ってくる、こうしているとまるで現状が嘘のように思えてしまうから不思議なものでござるな。

『よく寝ているでござるよ、史伽殿はずつと拙者を？』

『そうだよ、運び込まれてから…今でちょうど六時間だね。禁止エリアは楓姉の地図にも記入してあるよ』

『六時間……その間に死んだ者は？』

『いないよ、このかが死んでから、誰も死んでない』

『……そうでござるか。して、此処には二人だけで？』

『うつん、超りんとくーふえ、後は』

『四葉さんが一緒ですう……』

寝ぼけ眼を擦りながら、史伽殿が起きて続けた。

『ふむ、ではとりあえず皆に挨拶しにいくでござるよ。二人とも、案内を頼むでござる』

その時だった、開いた扉から室内に何かが転がってきたのは。

ゴロゴロと転がってきたソレは、史伽の足に当たり、ようやくその動きを止めた。

『……！！二人とも、早く此方に……！！』

いち早くソレの正体に気付いた楓は、二人を抱き抱えるようにして、ベッドの向こう側へと飛び退いた。

同時に、室内を爆薬とそれに伴う煙が襲う。

『流石楓ネ……敵に回すと厄介な相手になるコト間違いないナシね』

煙の向こうから、そんな声が聞こえてきた。

『これでよし……にしても疲れたな、流石に四人分の墓を作るとなると』

再び場面は代わり、島の南部、見晴らしのいい場所に千雨はまき絵達の墓を作った。

本人からしてみれば、一種の恩返しのようなものだ。

誤った道に進まずにいられたことへの恩返し……自分にしてやれることはこれくらいだと、軽く手を併せるとその場に寝転がる。

無用心かもしれないが、それほどまでに体力を奪われていたのだ。

暫くしてふいに、頭に影がよぎる。慌てて飛び起きた千雨の前にいたのは、怪しげな格好……といってもシスター服に口元を隠しているだけの姿だが、女子九番の春日美空がいた。

『……………何やってんだお前は？』

正直唖然とした、なんだか無駄な体力を使った気がする。

『……………えーっと、気分転換？』

ハハハ、なんて乾いた笑みを零して春日は笑う。つーか、こいつ何でシスター服なんか持ってやがるんだ？

『……………で、何かようか？』

一様、聞いてみる。この際服装うんぬんは突っ込むのをやめよう。疲れるだけだ。

『やだなあ……参加者が会ったらやることはひとつ、でしょ?』

ナイフを構えながら春日が言う、顔は笑ってるのに、目が笑っていない。これはマジってやつだな。

『やめとけよ、無駄に命を落とすことになるんだぞ、他をあたれよ』
そう言いながらさりげなくポケットのデリンジャー銃を掌に移す。

『とかいって、後ろから不意打ちされたんじゃないさ?やるしかないんじゃない?』

『……………仕方ねえな』

ナイフを振り上げた瞬間に春日の胸を銃で貫く。その結果、春日はあっさりとその場に倒れた。

『……………だから言っただろ、無駄に命を落とすことになるって』

- - - まき絵、私はまた一人クラスメートを手にかけてよ。

お前は、こんな私を憐れむだろうか?

だが、生き残るってのはそういうことだ……許してくれるかな?

第二夜？（後書き）

女子七番、柿崎美砂

女子八番、神楽坂明日菜

女子十一番、釘宮円

女子十二番、クーフエイ

女子十七番、椎名桜子

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り12名。死亡者、一名。

女子九番、春日美空。

長谷川千雨と対峙するも、ナイフでは銃相手に敵わず射殺される。

第二夜？（前書き）

メンバーも、数えるほどとなりました。

ここにきて、頑なだった千雨の心にある変化が芽生えます。

明日菜は今どうしているのか……楓は超に勝ち、必ずあるであろう解毒剤を二人に与えられるのか……次からは、そこに触れていきたいと思います。

といっても、明日菜が出るのはラスト辺りと決めています。
では、本編へどうぞ。

第二夜？

日はゆっくりと沈みはじめ、やがて漆黒の、そして二度目の闇がやってくる。

彼女達にとって、それは死と言う絶望へのカウントダウンにすぎない。

——もう半刻も過ぎれば、二日目が終了しようとしていた。

『……さて、ずっと考えてたネ。要注意人物のかえでサンや龍宮サンらをどう始末するか……』

コツコツ、と靴音を鳴らしながら超殿が室内に入ってくる。

『そこで考えたネ、龍宮サンには刹那サンをぶつけて、かえでサンには史伽と風香を利用しよう……』

『利用……？拙者を仕留めるためだけに、この二人を生かしていたと？』

腕の中で震える二人を見ながら問い掛けた。仮にそうだとすれば、彼女は人をなんだと思っているのだろうか……？

『その通り……有能たる私が生き残るのは当然の事ネ。かえでサン……世の中には、利用される人間と利用する側の人間しか存在しない。私は……当然する側の人間ネ』

『だから、拙者らには死ね……と？何故、共に逃げる道を見い出さず、争う道を選ぶのでござるか？』

だんだんと煙が晴れてくる。二人を護るため、そつと銃に弾を装填し、それを構える。

『科学の進歩には、争いが付き物ネ……私という有能な科学技術の塊が進歩するためにも、争いは必要ネ』

コツ…ツ、と足音がやんだ。すかさず銃を入口に向ける。こちらが先に動ければ、勝てる確率は……

『防毒……マスク……？』

手が、思わずとまった。煙の晴れたその先には、マスクを被り、不敵に微笑んでいる超殿の姿だった。

『……楓……ね、……え……』

同時に、いつの間にか充滿していた毒を吸い込んだ風香殿達が床に崩れ墜ちた。

時同じくして、南の区間で大きな爆発が起こった。

近くで仮眠をとっていた千雨は驚いて跳ね起きる。

何事かと辺りを見渡せば、森の一角がまるで地雷でも炸裂したかのように壊滅していた。

『……なんだよ、コレ……』

わけもわからず、その場に立ち尽くした千雨の鼻腔を、鉄臭い独特

の匂いが刺激する。

『……血の匂いか……いったい誰だ……？』

何があるか分からない、慎重に歩みを進める。

すると、爆発の衝撃でバラバラになったのであろう誰かの手足や肉塊の一部が辺りに飛び散っている無惨な現場にたどり着いた。

『……椎名か、何があつたんだ？』

ペタン、と力なく座り込んでいる椎名を見つけ、近くに寄ると声をかけた。

椎名がここにいてことは、死んでるのは柿崎と釘宮か…？

『千雨ちゃん……。場所を、移動しようとしたらね、爆弾でもあつたのか円と美砂の体が吹き飛んで……』

それ以上、言葉が出ないようだった。

どうやら、誰かの仕掛けた罠に引っ掛かったらしいな。

これじゃ、もう迂濶に森には入れねえだろう、何処に何があるか分かったもんじゃねえ……

『……それで、お前はこれからどうするんだよ』

『……千雨ちゃん、私を殺してくれないかな？』

……… ったく、なんでどいつもこいつも簡単に死に急ごうとするんだよ。私には、今の椎名が神楽坂にだぶって仕方がなかった。

『私、決めてたんだ…危険をかえりみずにずっと待っててくれた二

人とは、死ぬも生きるも一緒だって』

『……そうかよ、なら……お前たち三人の命、私が背負って生きてやるよ』

銃をとりだし、椎名に向ける。

正直、殺すのは気が引けるんだが椎名の目を見た以上、決意は固いのが分かった。

放っておいても勝手に自殺するだろう。

なら……せめて、私の手で殺してやるのが情けってもんだ。

『千雨ちゃん……ありがとう』

パン……ツと、渴いた音が一つ鳴り響く。

椎名は、笑みを浮かべたまま釘宮達の所へと旅立っていった。

『……ばかやろう、礼なんて……言うもんじゃねえよ……』

……すっかり弱くなっちまったな、私も。

クラスメイトを殺して、こんなにも心が痛いんだから……だが、それは私が人間をやめていない、唯一の証明なのかな……？

『……神楽坂、また……会えるよな？』

誰に問うでもなく、ポツリと呟いた。そして、改めてまき絵らに手をあわせ、神楽坂に再び合流するためにその場を離れた。

……望みは薄い、確率なんか0に近いだろう。でも、もし生きて

逃げ出せる方法があるんなら……私は神楽坂、お前と一緒に、それを探してみたい。

……今なら、素直にそう思えるよ。

だから、お前は死んだりなんか、してないでくれよ？

第二夜？（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り9名。死亡者、三名。

女子七番、柿崎美砂

何者かの仕掛けた罠にかかり、爆死。

女子十一番、釘宮円

柿崎美砂と同上。

女子十七番、椎名桜子

親友の美砂、円の死を目の当たりにし、現れた千雨に殺されることを望み、千雨もそれに同意したため、射殺される。

第二夜？（前書き）

これにて二日目は終了です、ここから先はあとがき更新なく？でラストまでいきます。

最終的には、映画一作目同様二人以上での脱出になります。

ただ、何人で誰が……までは明かせませんが、決めてはいるので、それをめざしてラストまで頑張りたいと思います！

第二夜？

『心配することないネ、かえでサンもじきに逝ける……この無味無臭の毒は、皮膚からも入るから、防ぎようもないネ』

軽く、目の前で超殿がそれが入っていたであろう小瓶を振る。

せめて……せめて、拙者が死ぬのなら、目の前のこの相手をも道連れにしてやりたい……！！

指を掛けた引き金を引こうとするが、力が入らない……体が麻痺しているような感覚に囚われる。

これも、毒の効能なのだろうか……

『風……香殿……史、伽殿……拙者のせいで……』

カクン、と体が二人の横に崩れる……自分と関わりを持っていたばかりに利用された二人にはただ申し訳ない気持ちでいっぱいだったのに、拙者はそれすら詫びることができそうにもない、口を動かすことができない……せめて、とばかりに二人に手を伸ばす。

こんなにも近いのに、うんと遠くにいるように感じる……結局、拙者の伸ばした腕は二人に届くことなく、地に伏した……

ようやくと動かなくなったかえでサン達を眺めていると、ふいに足音がしたのでそちらを振り替える。

『流石は、忍ですね……薬が効くまで少々時間がかかりました』

彼女は、時計で確認しながら室内を換気する。そこでようやく私も

マスクを脱げた。

『ご苦労ネ、五月……それじゃあ後は手はず道理に頼むネ、私は少し横になるヨ』

『はい、食堂の方に食事は用意していますから』

超から後始末を頼まれた女子三十番の四葉五月は部屋を後にする彼女をペコリと頭を下げて見送る。

まるで使用人とその主のようであるが、彼女達とて明日には戦わねばならぬ関係、そのことがさらに二人にどこかよそよそしい動きをさせていた。

場所は代わり、穏やかな波風が舞う湾岸沿い……森に入ることを選じた千雨は南から西、北へと向かうべく歩いていった。

目的は、神楽坂明日菜を探し、共に逃げる抜け道を探すこと。しかし、肝心の明日菜本人がなかなか見つからない。島は広い、そんな中で特定の人物を探すなど、難しい話なのだから、それは致し方ないと心に言い聞かせて千雨は歩く。

『……まったく、無駄に船並べやがって……どうせ誰も逃げられやしないってのにな』

海沿いを歩くようになってから気付いたが、どうやら島をぐるりと等間隔で政府の船がかこんでいるらしい、恐らくは外海からの侵入船を防いでいるのだろが、こつも多いとこちらの気分が滅入ってくる。

『……神楽坂のやつ、まだ生きててくれてるよな？』

思い出すのは、絶望にうちひしがれていた神楽坂の姿……少なくとも、禁止エリアからは出たらしいがその後、どうしているかまでは分からない……だが、死んでる姿を見るまでは希望を捨てるわけにはいかない、そういう思いでいるしか私にはできなかった。

しかし、海沿いがまだ一度も禁止エリアになっていないのは幸いした。

これなら、時間はかかるが少なくとも、一度は島を一週できる。外にしなければ森の中ということになるから探す範囲が狭まるというものだ。

『……もう夜か、時間つてのは経つのが早いな。普段なら全く気にならねえのに、今は無性に止まってくれればいいと感じる……焦って、神楽坂が見つかるわけでもないのにな……』

しかし、タイムリミットは近づいている……逸る気持ちを抑え、私は足早に島を回ることだけを意識した。
神楽坂が生きていることを願って……

——あれから、何時間くらいたっただろう。

すっかり日もくれてしまった森の中を、私は前を歩くある人の後ろ姿を見失わないようについていく。

時折話しかけてはみるんだけど、元々クラスの中でも喋ってる姿をみたことのない相手、こちらをみてはするけど、会話にはならない。未だに何処へ行くのか、これからどうするのかさえも知らされない私には、ただ不安だけが渦巻いている。

『……………神楽坂さん』

ふいに立ち止まり、眼前の女子三十一番のザジちゃんが私の名前を呼ぶ。同時に、視界が広がる、どうやら森を抜けたらしい。

『なに、ザジちゃん…？』

波の音がする中、私は彼女に問い返した。

『……………貴女は、生きたいと言った。なら、生き残った後は、どうするの？』

『……………分からないわよ、今は。逃げ切れたら、ゆっくり考えるわ』

『……………そう』

それだけ言うと、また彼女は歩き始める。

いったい、何が聞きたかったのかはさっぱりわからないけれど、私は彼女についていく。

ついていけば、逃げ切れるのだと信じて……………

第二夜？（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデー

残り？名。死亡者、？名。

第三夜、終幕に向けて（前書き）

彼等はださねばならないがために出しました。

勘の鋭い方はここでラストの展開が読めてしまうのでは…と不安ですが、どうか最後の最後までお付き合い願えれば幸いです。

第三夜、終幕に向けて

残りの半刻も過ぎ、再び暗い闇が訪れた。

今となつては、政府の人間しか残っていない校舎の一室、さしずめ休憩室とでもいったところか、薄暗い僅かな灯りがともされているだけのその部屋には、男が三人、女が二人いた。

軍服に身を包んではいるが、どこか軍人のそれとは違う雰囲気漂わせる彼等は、ヒソヒソと小声で話をしていた。

『残りも僅かになつてきたな』

男の一人が、無線から流れるやりとりに、思わず溜め息を漏らす。

『仕方ないさ……私達だつて逆らえなかつたんだ、止められやしない』

それに答えるように、ドラグノフという名のライフル銃を手入れする女が口を開く。

慣れた手付きでそれを済ますと、中央で椅子に座り、腕を組んで考え事をする男を見る。

どうやら、彼等はB R優勝者の集まりらしい。

『……七原、いつ行動を開始する？』

七原と呼ばれたバンダナをつけた男は、静かに顔を上げ、口を開く。

『すまない、サキ……まだ彼女から連絡がないんだ。もう少し潜伏を続けよう、今焦つては、残る彼女達を助けられなくなるからね』

『……なら、仮眠でもとつてるよ。何かあつたら起こして』

不服そうにするわけでもなく、むしろ納得したようにそのまま銃を抱いて眠る。

それが、彼女にとってのいつもの行動なのだ。

『秋也、お前はリーダーなんだ。少しは休め…丸二日、寝てないだらう？』

また別の男が七原の肩に軽く手を置いて口を開く。
それにたいして七原は、いいんだ。とだけ返した。

『それより、左海や今給嶺さんこそ休んでおいてくれ。二人にはやつて貰うことが沢山あるからさ』

最初に、数が少なくなったと口にした男と傍らの男、いまきれ今給嶺とさかい左海に目を向けて七原は言葉をつむぐ。

『そうはいいますけど、七原さん…貴方にだってやることはあるでしょう？少しは仮眠をとってください』

今給嶺が困りながらも、現リーダーに返答する。

『そうだよ、あたしまだ仕上げが残ってるし、秋也がいざって時動けないんじゃない？こっちが困っちゃうよ』

部屋の片隅でなにやらパソコンをいじり、システムを組み立てていた女が振り向いて苦笑いする。

『……そうだな、じゃあマキ。暫く頼めるか？』

申し訳なさそうにして、七原はマキに頼む。

『ん、任せといて』

それにたいして、マキも頷く。それからすぐに七原は眠りにつき、左海と今給嶺も仮眠に入った。

七原秋也、桜井サキ、早田マキ、左海貢、今給嶺聡……それが彼らのフルネーム。

彼等は、総司令を勤める三村という男から助けてやってほしいと頼まれ、こうして潜伏しているのだ。

——そして、ついに運命の最終日が幕をあげた。

朝日があがる頃合いには、死んだ人数と禁止エリアが発表される。

『……そうか、長瀬や古達も死んだのか……』

海辺にあるボートの貸し出し屋だっただろう小屋の中で、千雨はポツリと呟いた。

これで残るは、僅かに数名……幸い、神楽坂は生きているようだ。長瀬には悪いが、少しホッとした。

『この先の灯台は昼前には禁止エリアになるな……その前に調べちまわないと』

ゆっくり起き上がり、その灯台を調べる為に小屋を後にした。早く神楽坂を見つけ出したい……そう思いながら。

第三夜、終幕に向けて（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り？名。死亡者、？名。

第三夜？（前書き）

さて、いよいよラストが近づいて参りました。

ここまで読んでくれてありがとうございます。
では、本編へどうぞ

第三夜？

千雨が灯台へ向けて歩みを再開し始めた丁度同じ頃、明日菜はザジに導かれて一足早く灯台へ到着していた。

『ねえ、ザジちゃん……此处になにがあるの？』

相変わらず、何も答えてくれないザジちゃんが歩くのをやめたので、再び聞いてみる。

でも、やっぱり相変わらずなため返事は貰えなかった。

『……はあ、まだ黙ってるんだ』

もう、何度目か分からない溜め息を洩らす。

それでも、私が彼女についてきたのは、ついていけば何らかの方法で助かるんじゃないかと思ったから。

……まあ、根拠があるわけじゃないんだけど。

『……中、入って』

等の本人は知った風もなく灯台の扉を開けて呼んでいる。

……何処か、胸騒ぎがした。このまま出てこれるのだろうか、と頭によぎったソレを、かぶりをふって追い出す。

『ザジちゃんについていくって決めたんじゃない……覚悟、きめないとね』

自分に言い聞かせるようにして呟くと、いまだ扉の前で待っていてくれるザジちゃんの元へと歩みを進めた。

『……………』

灯台の中は薄暗く、歩く音が反響するから意識しなくても緊張してしまふ。お互い無言のまま一番奥にある扉の前まで来た。中から話し声をする……………この声は、さっちゃんと超さん……………？

『さて、そろそろ時間ネ……………』

『そうですね、でもいいんですか？彼女にちゃんと説明しなくて』

『説明した所で、おバカには分かりっこないネ……………それに、敵を欺くにはまず味方から、という言葉があるヨ』

喉元の爆薬に仕掛けられている盗聴器から声がもれないように五月と話していると、ノックがした。

いよいよ作戦も大詰めと言った所ネ。

『……………ようこそ、明日菜サン。待ってたネ』

部屋に入ると、やっぱりそこにいたのはさっちゃんと超さんだった。でも、同時に何かの匂いが漂ってくる。

さっきの二人の会話がよく聞こえなかっただけに、いに知れぬ恐怖が体を支配した。

『超……さん、この匂い……それに、待ってたって……？』

いまいち状況が飲み込めない、自分はなぜ彼女に待たれていたんだろっ……？

『まあ、そんなところにいないでまずは食事からネ……五月が作ってるから味は折り紙つきネ』

こちらにこいと手招きされた、ゆっくり中に入ると、ようやくそこが食堂のような場所だったのだと気付く。

『安心して下さいね、毒なんて入れてませんから』

ザジちゃん、さっちゃん、超さんを前にして椅子に座るとそう言いながらシチューが目の前に出された。どうやらさっきの匂いはこれみたいね。

二日ぶりの、まともな食事に自然と目が潤んでくる。

『ありがとう、さっちゃん』

一言、お礼を言うのとそれに口をつける。

温かなシチューは、私の体をすぐに暖めてくれた。思わず、本音が漏れる。

『……………美味しい、刹那さんや木乃香にも、食べさせてあげたかつ

たな』

思い出して、また涙が頬をつたう。

『……そう、刹那サンには実に悪いことをしたネ』

まるで何かを思い出したかのように唐突に超さんが話しだす。

『まさか、彼女が相討ちになるとは考えてなかったネ……お陰で、計画に少し支障がでたヨ』

『……けい、かく？』

温かなシチューをゆっくり飲んでいた私の手は、その瞬間ピタリと止まった。

同時に、視界がグニヤリと歪み始めた。

倒れ込まないように、体を支えようとしてみるけど、力が入らない。

『まあ……それももう修正済みネ』

『超……さん、これ……どうい、う……』

超さんの話も話半分でとうとう体がテーブルに倒れ込む。

……まさか、ここで私は死ぬの……？

死にたくないよ……刹那さんが、木乃香が、楓ちゃんがやろうとしてたこと、私がしなきゃいけないのに……！

『ゆっくり眠るネ……明日菜サン？』

そんな言葉を聞きながら、私はとうとう意識を手放した……

『……さて、それじゃあ連絡をつけて最終段階に入るとするネ』

再び、手で盗聴器を隠しながら二人を、そして目の前の明日菜サンを見て口にする。

『……………わかった、連絡する』

そう言ってザジは部屋を出ていった。

第三夜？（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り？名。死亡者、？名。

第三夜？

ザジが出ていくのを確認し、五月に向き直る。

『もうじき、彼女が此処にくるネ。明日菜サンをかえでサンと同じく例の場所に運んでおいでくれるネ？』

『はい、今はまだ彼女に……長谷川さんに知られるわけにはいきませんからね』

ペコリ、と頭を下げると五月は明日菜サンを連れて指示した場所に移動した。既にかえでサンはそちらに移動させてある、彼女が調べてもなにもでてこないネ……

場所は代わり、再び校舎に移る。

多くの軍人が忙しく職務にあたる中、担当教官の鳴浜はコーヒーを飲みながら一人離れた場所でそれを眺めていた。

その目は、担当教官としての彼女……ではなく、亡き娘を想う愁いを帯びた目だった。

慌ただしいためか、その場にいる誰もがそんな彼女の様子に気付いていない。

『……さて、そろそろかしらね』

だからこそだろう、彼女が呟いた言葉もまた……バタバタした騒音に掻き消されていった。

ふいに、胸元にしまつてあるあるものが震えだす。
誰にも見つからないよう注意を払いながら、ソレを取り出してそつと内容を読む。

『作戦決行は今より三時間後……か』

再びしまうと、飲みかけのコーヒーをまた一口飲む。

そして、軍人の中から一人呼び出し、理由をつけて二人で部屋をでた。

その後、彼をつれて自室に戻る。

『……まず、貴方に聞いておきたいことがあるわ。今でも、この法案に疑念を抱いてる？ 高科雪斗君？』

私は、以前疑念をぶつけてきた彼に向き直り、聞いた。

『……もちろんです。俺は高校時代、隣のクラスにいた恋人をこの法案のせいで奪われました。それだけじゃない……親友も、家族も、なにもかもを奪われた……あんだ達政府に……！！』

怒りが爆発したのか、彼は肩を震わせてどなった。

この部屋を防音にしておいてよかったわね……今のは軍人にあるべからざる発言よ。なんて、一人考えながら手持ちの資料を見る。

『高科雪斗……第二十四回 B R において恋人関係にあつた小野梓を失う。その後、家族らと共に反 B R 活動を行うもそこで親友南祐介、両親を失い逮捕される。その後、更正の名目で軍に加入させられ今に至る……だからこそ、私はあえて貴方をこのゲームに連れてきたのよ』

淡々と読み上げ、再び相手を見る。
さっきの怒りはどこにいったのか、今の彼は冷静さを取り戻していた。

『……貴女、政府の駒じゃないですね？』

『のみこみが早くて助かるわ、貴方に再び戦うチャンスをおあげる。
私の所属する組織に入らない？』

『……それは、別室待機の彼らとも関係が？』

『ええ、そういう頭の冴える貴方なら加えるに値するわね。これ以上、無駄な犠牲者は出したくないでしょ？』

『……で、俺になにをしろと？』

少し考えた様子だったけど、どうやらこちら側につくようね。
ほんと、手間が省けて楽だね。

『彼らに、作戦決行は三時間後と伝えに行つて貰えるかしら？私から話を聞いたと言えば歓迎してくれるはずよ』

『わかりました、伝えてきます』

彼は一礼すると、部屋を退室していった。
フー、と長い息を吐く。こつも順調すぎると、かえって怖くなってくるわね。

……でも、チャンスは今しかない。このまま、無事に終わってくれればいいんだけど……

カタカタと、パソコンを操作する音だけが室内にこだまする。

マキはあれからもずっとパソコンに向かっていた、その画面の文字が複雑化していきやがてある形が画面上に現れた。

『やった……完成』

ひとり、呟くようにして息を吐く。

そんなマキの傍らに、いつ起きたのかサキが立つ。画面を除き込み、ついでマキの顔を見る。

『これで、いつでも作戦決行できるね。確か、一人だけ影響を及ぼさないんだって?』

『うん、そこは結構苦労したんだけどさ、なんとか完成に漕ぎ着けた』

『こんな芸当、あんたにしかできないからね。疲れただろ、今飲み物入れるよ』

『うん、ありがとう』

マキは、サキが飲み物を入れに離れたのを目で追いながらも、近くで眠る秋也の寝顔を眺めた。

『マキ…あんたさ、七原に告らないの?好きなバレバレなんだけど』

すぐに、サキの皮肉めいた声がある。

慌てて反論するが、ハイハイと軽く流されてしまった。
赤面しながら、運ばれてきた飲み物を飲む。

その時、ノックが一回あった。

その音に他の皆も起きたらしく上体を起こした。

サキが目配せして、此方からノックを二回かえす。

これでかえってくるノックが四つなら鳴浜さん、それ以外なら他の人ということになる。

コン…ッ

コン…ッ

コン…ッ

コン…ッ

等間隔で、四つのノック音……秋也が合図して、サキが扉を開けた。
だけど、そこにいたのは意外な人だった。

『……あんた…まあいい、入りな』

多少驚きながらも、取り決めたノック音をかえたので、サッと目配せして、サキはやってきた高科を中に招く。

『……驚いたな、なぜ君があ回数を知っているんだい？』

『俺は、高科雪斗…事情は鳴浜教官…いや、鳴浜さんから聞いている。俺もそちら側の人間だ』

その名前に、左海が驚いた表情を見せる。

『その名前には聞き覚えがある、家族全員処刑されたと聞いていたが……生き残りがいたのか』

『年齢が若かったので、更正の名目で軍に入れられました。いつか復讐してやるんだと考えてたんで、今回こちら側につかせて貰いました』

『……で、あんたを仲間にするのはわかった。用件は？』

サキが、納得したように頷いて言う。その後、七原に目配せすると、彼も同様に頷いた。

『作戦決行は、今より三時間後。との伝言です』

『わかった、ありがとう』

でわ、と彼は頭を下げてから退室していった。

七原は、皆の顔を見渡してから

『マキ、準備はできてるか？』

『任せて、秋也。さつき完成したよ、いつでもオツケー！』
すぐにパソコンに飛び付き、タイマーをセットする。

『よし、じゃあ三時間後に行動開始だ』

七原のその言葉に、その場の全員が頷いた。

第三夜？（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデイ

残り？名。死亡者、？名。

第三夜？

七原達に作戦決行が伝えられた時刻より一時間が経過した、にも関わらず千雨はまだ灯台にたどり着けていなかった。

距離があるのは仕方がないとしても、どうやら別な理由もあるようで……

『……駄目だ、もう動けねえ』

万策尽き、力尽きるかのようにその場に寝転がる。

いったい、何処でペース配分間違えたんだ…？

そう考えながら、体を起こし、既に空になってしまった三本のペットボトルを取り出す。

そう、大事な水が底をついたのだ。

『歩き始めた頃はまだ、一本半残ってたはずだよ……なのに、なんで30分足らずで空になっちまうんだよ』

後悔先にたたず、とはよくいったもんだ。海を眺めながらなんの考えもなしに喉を潤した結果がこれだから……

溜め息をつきながら、眼前の海を眺める。

昔、何かの本で人は水を見ているとなぜか喉が乾いてくる。などという迷信めいた記事を見たことがあるな…なんてボンヤリ考えながら喉元をさする。

かれこれ一時間…いや、実際にはそんなにたってないのかもしれないな

いが、自分は水分をとっていない。

脱水症状にはまだ早いだろうが、喉が乾いていては食べ物を食べる気力もわかないというものだ。

『せめて、井戸かなんかあればいいんだがな……』

けして、目の前にある海のせいにするつもりはない……しかし、海水でも、水は水。

こつもこれ見よがしに眼前にあるとイライラしてくるな……まさしく、今こそ海に向かってバカヤローと叫びたくなる。

……まあ、それこそ無駄に体力を消耗するだけだからしないが。

第一、誰も見ていないとはいえ恥ずかしさとそのあとにくるむなしさに襲われるだけだ。

……私のキャラでもないしな。

『灯台の禁止エリア時刻は三時間後……って聞いてんだ。それまでに、なんとかつかないとな……』

喉が乾き、力のでない体に鞭をうち、なんとか再び歩きだす。

それもこれも、神楽坂が生きていると信じているからこそだ。

きつと、死んだとわかれば私は動けなくなるんだろ……… そうなったら、まき絵や椎名達に顔向けできそうにない。

苦笑いにも似た笑みを浮かべ私は歩みを進めた。

一方、灯台において最後のキーパーソンである千雨の到着を待つ超たちだったが、本人が水不足に困り、なかなか歩みを進められてい

ないことを知らないおかげで超が若干動揺しはじめるという事態に陥っていた。

『千雨さん、遅いですね……もう二時間くらいしか時間ありません。どうしますか？』

五月が、時間を確認しながら超に尋ねる。

その超はというと、先程からウロウロしながら何か考え事をしていくようで、その様子に五月も苦笑いになる。

『動揺してますね……焦る気持ちはわからなくてもないですが……』

『それってどーよー？』

ピシ……ッと、場の空気が固まる音がした。

それがザジの言いになった寒いギャグのせいかは分からないが、ようやく超が椅子に座る。

『……点数で言うなら、15点といった所ネ。それより、何か不測の事態が発生している可能性があるネ、五月……すまないが迎えにでて貰える力？』

その問いに、五月も頷く。すぐに立ち上がると、水の入ったボトルを手に持つ。

『もしかしたら、水を切らしたのかもしれませんが。持っていけますね？』

柔らかく微笑み、五月は迎えにいくため灯台をでていった。

『やっと灯台が見えてきたか……でも、遠いな。やっぱり水の確保が先か？』

なんとか灯台を目視できる位置までこれた千雨だが、照りつける太陽のおかげで水分を大幅に消耗してしまっている。考え事をするのも億劫になってきた。

『……ハ、ハハ……まじで駄目かもな』

さすがにヤバイと感じ、日陰を探して座り込む。そうになると、今度は立ち上がる気力がなくなる。

ボンヤリ、走馬灯らしきものまで見えはじめてきた。

このまま、ここで死ぬのか……？

死因、脱水症……笑えねえ冗談だな。人を何人も殺しておいてそんな死に方なんて……いくらなんでも許されねえよな。

千雨は、体力を振り絞ってバッグを漁る。美空から奪ったナイフが手に当たった。

それを取り出す。

『どうせ死んじゃうんなら、痛みを伴うべきだよな……？』

すっかり諦めムードの千雨、ナイフを首筋に当てる。

その刹那、目の前に水のボトルが差し出される。千雨がキョトンとした目でその先を辿ると、超からの指示を受け、千雨を探しにきた

五月がいた。

『……四葉、お前、なんで……？』

突然のことに、頭がついていかない千雨を見透してか、五月が口を開く。

『だめですよ、千雨さん……貴女は自殺するべき人ではありません。それより、水……いかがですか？』

ス、と先ほど見せられたボトルが改めて差し出される。

……不思議だ、何故かはわからないが四葉を敵と認識できなかった。

さっそく、その封を切って飲ませてもらう。

半分ほど流し込んだ所で、ようやく体が生き返ったらしい。

『……助かったよ、地獄に仏とはこのことだな』

『いえ、私は私にできることをしただけです。……よければ、灯台に寄っていきませんか？休憩くらいならできると思います』

『……そうだな、どうせ寄るつもりで歩いてきたんだ。そうさせてもらうよ』

時間もまだあるはずだろうし、四葉から神楽坂の情報を得られるかもしれない。

ここは素直についていくべきだろう、と考え私は四葉と一緒に灯台へと歩き始めた。

第三夜？（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデー

残り？名。死亡者、？名。

第三夜？（前書き）

いよいよクライマックスに入りました、自分のような未熟者の書く文章を

3000人を越える読者様が読んでくださり、感謝の極みであります！

あと少しですが、最後までお付き合い願えれば幸いです。

第三夜？

『……なるほどな、大体の話はわかったよ』

四葉に連れられ、私は灯台へとやってきた。そこで超から聞かされたのはこの悪夢みたいなゲームから複数で、なおかつ生きて逃げ出す、それこそ夢みたいな内容だった。

『それはよかったネ……それで、返答は？』

ゆつくりと飲み物を飲みながら超が聞いてくる。

『だが、本当に大丈夫なのか？ いざってときになって裏切ります……なんてパターンもなくはないからな』

『………大丈夫ネ、信用するなら、生きて帰れるネ』

………おい、今の長い間はなんだ？
それに目をそらすな、それでは疑ってくれと言ってるようなものだろうが。

ハー、と深いため息を吐いて改めて椅子に座り直す。

超の計画はこうだ、この島の北部にある崖下に、洞窟がある。

鍾乳洞のようなものらしいが、そこに潜水艇を隠してあるから、それに乗って奴等の軍艦の真下を通って逃げ出す。

ああ、確かに逃げるのはできるな……頭に想像し、納得して頷く。

『で、首輪……こいつはどうするんだよ？島から離れても爆発するって聞いているぞ？』

『精通した技術者を雇ってるネ、その者にかかれば簡単ヨ』

……なるほどな、軍に関わりがあるからといっても一枚岩じゃないってことか。

不満や疑問を感じているやつらが、その中にいるんだな。

『……わかったよ、どのみち神楽坂と合流して脱出の方法を考えるつもりだったんだ、渡りに船とはこのことだと思って、策に乗らせてもらおうよ』

『賢明な判断で助かるネ……さて、それじゃあ今から一時間後に北の外れで待ち合わせするネ。明日菜サンの搜索はこちらに任せて、のんびり島を探索でもしてくるといいネ』

『……そうだな、もう一度まき絵達の墓にでも手を合わせておくか』

向こうは三人いるんだ、神楽坂もすぐに見つかるだろうと考えて、立ち上がる。

『水のスペアです、外は暑いですから気を付けてくださいね？』

部屋を出ようとすると、四葉がボトルを三本くれた。

水を切らしていた私からすればありがたいことだ。礼を言って再び灯台を離れた。

『鳴浜教官、奴等の言ってたことはホントなんですかね？』

場所は変わって対策本部、末端の軍人が疑問を抱いて鳴浜に尋ねた。

『潜水艇の話？そんなのあるわけないでしょ、ブラフよ、ブラフ…
第一、この島に鍾乳洞らしきものじたいないわよ、調べに調べたんだから』

まあ、実際ないのだから事実を言う。

あくまで戴くのは一隻の軍艦そのもの…潜水艇なんて見つかりやすいもの、私達が用意するわけじゃないじゃない。

『気にしないで、作業に戻って？どうやら、あのこの作戦勝ちみたいだけどね……』

知らぬ顔で指示を出す。……もうじきよ、もうじきこんな忌々しい連中とおさらばできる。

それを考えただけで、幾分かは気持ちが楽になる。

無論、それで私の冒してきた罪が消える訳じゃないけれど……

『……………そういえばさ、風間かざまと米内よないは何処どこにいるの？ここに來てから、一度も見てないけど』

作戦決行時刻を待つ間、サキはふと疑問に思つて七原に聞く。

同じスナイパーである風間は、寡黙な男だ。

別の場所にいても、なんら疑問はない…問題は、じっとしているのが苦手なタイプである米内の方だ。

『米内は、この任務には向かないからね。今回は三村さんについて行動してもらっているよ』

七原に続けて、左海が口を開く。

『風間には、外にある船の中に潜り込んでもらっている。こちらと違い、貨物室にいるから待遇は悪いけどな』

『……………米内は留守番で、風間は奪う船の中か……………見つからなきゃいいけどね、風間』

もう何日も声を聞いてない、よきパートナーである風間の顔を思い浮かべる。

寡黙な男だが、私にとってあいつの横は居心地がいい…無事を願うばかりだ。

『……………ふーん、サキは風間が好きなんだ？』

『……………つな、いきなりなにいいだすのさ。…別に、私はそういう意識なんてしたことはないよ。ただ、風間とは古いツレだからね。少

し身をあんじただけさ』

『……ふーん、まあ…そういうことにしておいてあげてもいいよ?』

……さっきの仕返しのつもりだろうか、ニヤニヤと楽しげにマキが言う。

下手に弁解すると逆にややこしくなりそうだと、この際無視しておこう。

そう思い、回りを見た。男連中も、笑みを浮かべている。

……後で覚えてなよ、何かしらの仕返しはするから。

そんなことを考えながら、無視を決め込むことにした。

『……まき絵、明石、和泉、大河内…どうやら、私は無事にこの島をでられそうだと。お前たちに救われたこの命…何処まで持たせられるかは分からないが、無駄にはしないからな?』

再び、最後の別れをしにきた私は、四つの墓に声をかける。

思えば、この三日間のあいだに色々あったし、私自身随分と変わった。

それもこれも、お前たちに出会えたおかげなのかな?

『……一緒に連れて行ってやれなくて、すまない。だが、代わりに託された想いは持つていくから、安らかに寝てくれよ?』

……そろそろ行こう、名残はおいしいが、いつまでもここにいるわけにもいかないからな。

『……じゃあな、次会うときは……良き友人として迎えてくれよ』

ボトルを一本開け、供養がわりに墓にかけていく。それが終わると、森を抜けてまっすぐ北を目指した。

第三夜？（後書き）

女子八番、神楽坂明日菜

女子十二番、クーフエイ

女子十九番、超鈴音

女子二十番、長瀬楓

女子二十二番、鳴滝風香

女子二十三番、鳴滝史伽

女子二十五番、長谷川千雨

女子三十番、四葉五月

女子三十一番、ザジ・レイニーデー

残り？名。死亡者、？名。

G E M E S E T そして…… 上（前書き）

ようやく、悪夢は終わります。

千雨は原作で魔法の存在を自力で気付いたので、超の思惑にも、自力で気付いてもらいました。

長いので、下に続きます。

G E M E S E T そして…… 上

『…………さて、これですべてのフラグは成立したネ。五月…ザジ、手伝い感謝するヨ』

彼女を見送った後、二人に向き直り、礼を言う。おそらく、一人ではここまでできなかったはず、仲間とは、やはりいいものだと感じながら目を瞑る。

思い出すのは、ありふれた今までの日常…もう、二度と戻ることはできないあの幸せ…

その時、一筋の涙が超の頬をつたう。

……まるで、この為に犠牲にせざるおえなかったクラスメート達に許しを乞うかのように。

ようやくここまでできた、数々の犠牲も払った……後は、全てが成功することを祈るだけネ……

……そして、最終段階へと超らの描いたシナリオは移動していく。

時が一つ、また一つと刻まれていく。

そして……

『……………遅いな、超の奴』

約束の時間まで、後数分しかない……………なのに、神楽坂はおるか超らまでいつこうに現れる気配がない。

もうすぐ、灯台が禁止エリアになる……………あいつらだって、その事くらいわかってるはずだよな？

腕時計を眺めながら、何度もせわしなく動き、辺りを見渡す。そうでもしていないと、不安に押し潰されそうだからだ。

だが、時は無情にもその動きをとめることはない。

……………とうとう、禁止エリアになってしまいう時刻を過ぎた。

『……………嘘、だよな……………？誰も、こねえじゃねえか……………』

風が、ざわめく……………

カチ…カチと、

時計の針が動くのを見ながら、ふと考えてしまう。

神楽坂も、

超も、

四葉も、

ザジも……………

自分を残して全員が死んでしまった、時間を見謝ったか……………または、神楽坂が敵と誤認したばかりに相打ちになってしまったか……………

『いや、大丈夫だ……………まだ死んだと決まったわけじゃない……………大丈夫、

大丈夫……」

必死に言い聞かせて、なんとか動揺を押さえようとする。

しかし……

『長谷川千雨さん、聞こえるかしら？』

島に、あの女の声が流れる。

その瞬間、脱力してその場に座り込む。

今この場で放送が入る……それは、このゲームの優勝者が決まったも同じだ。

案の定、感情のない無機質な声は私に学校まで戻ってくるようにと告げ、そのまま切れてしまった。

『……言っただじゃねえかよ……超、生きて一緒に脱出しようって……バカヤロウ……』

だが、私は自分から命を投げ出すことは許されない……力のない足取りで、学校へと歩き始めた。

『さて……高科君は彼らを呼びに行ってもらって、後の皆は私の乗る船のクルーを残して全員撤退してちょうだい。いい？全員だからね』

放送を終えた後、私は回りを見渡してそう告げた。流石に動揺が走

る。

まあ、全員撤退なんて言われたら仕方ないわよね。

『はいはい、騒がないの。これから来るのはその道のプロよ、護衛は彼らにやって貰うわ。はつきり言うた貴方達は邪魔なのよ、優勝者は女の子だからそれなりのケアも必要なの、男が沢山いたんじゃケアもできないわ。文句があるなら、帰ってから上に言いなさい』

そう言われては仕方がないと諦めたのか、渋々ながら彼らは退室していった。

中には不服を申し立てる、なんて呟いてるのもいたけど、好きになさいな。どうせ私は二度と戻らないんだし、知った事ではないわ。

数分の後、彼らを連れて高科君が帰ってきた。

『さて、さっそくだけど分担ね。サキは千雨さんの出迎え、マキはお風呂の準備……左海と今給嶺、それから高科君はこの場の後始末を、秋也は超さん達の迎えとそちらの後始末をお願いね』

指示を出し、一息つく。ああ……一様報告書を送っておかないと。書き溜めた報告書を、本土にファックスで送る。これで、私の仕事はおしまいね。

……さて、千雨さんには何を言われるかしらね。

『風呂と食事が用意されてる、それがすんだら、鳴浜が話したいっ

てさ』

戻ってくると、女の軍人が出迎えに出てきた。中を歩きながら、一方的に話を進めてくる。

『サキ、ここからは私が代わるよ』

風呂場につくと、別の女がいた。サキと呼ばれた女は、わかったとだけいうと離れて何処かへいつてしまった。

『なんだ、あいつ……』

『サキはああいう性格なの、勘に触ったなら私が謝るよ、ごめんね？……それと、おかえりなさい。辛かったでしょ？お風呂からあがったら、首輪外すから早く入って？』

一気に捲し立てると、押し込める形で浴室に案内された。

服を脱ぎながら考える。

帰ってから、なんだか妙な違和感を感じる。

いや、違和感だらけだ……まず、あんなに沢山いた軍人がいなくなっている。

それに、女の軍人なんかいたか？出るときは見掛けなかったが……一番気にかかるのは、さっきの『おかえりなさい』だ。

…軍人がおかえり？

訳わかんねえな……首を捻りながら、私はひとまずシャワーを浴び

ることにした。

訳がわからないといえば、なんで超達は死んだんだ？

超が時間を見謝るなんてミス、するとは考えられないしな……神楽坂とやりあった、てのもいまいち引っ掛かる。

アイツはバカだが、話せばわかるはずだ。

場所を離れたってことは、桜咲達の意味をついだってことだしな。

……となると、政府の連中か？

いや、それはありえねえか……だったら、作戦を話してる時点で私も合わせて首輪を爆破されてるはずだしな。

わざわざ後から超達だけ爆破するのは妙だ……

『……………まさか、な』

となると、考えつくのはただひとつだ。

その、まさかな作戦にひきつったような顔になる。

おいおい、だとしたらもつと早くにできただろうが……こうなった
ら、カマ、かけてみるか……？

疑問は解消するに限る、鳴浜が話したいと言ってたらしいから、直接聞いてやるさ。

『制服、洗濯したからこれに着替えて？サキの着てるやつなら、貴女も着れると思うんだけど……』

『ああ、着ればなんでもいいさ』

差し出された何処にでも売ってるような、一般的なトレーナーとズボンを着る。

……つか、これ男物だよな？

サキのだとか言ってたが、別の奴の間違いじゃねえのか…？
などと、目の前の女が首輪をはずしている間、そんなことをふと考えた。

『それじゃあ、食堂に連れていくね。そこで鳴浜さん、待ってるから』

『ああ、アイツには色々聞きたいことがあるからな。早めに会いたいと思ってた所だ』

まあ、たまには男物を着るのも悪くないな。

……後でパソコンにも記念にアップしとくか。

『よく勝ち抜いたわね、座って、話でもしましょうか？』

『勝ち抜いた、ねえ……デキレースの間違いだと思うんだがな』

座りながらも、早速切り込んでみる。

ピクリと眉を動かし、なんのことだと切り返してきた。

……おかげで、十中八九考え通りだと確信を持てた。

……超に会ったら、ひとまず一発、あの顔をぶん殴ってやる。と心に決めたのは言うまでもない。

G E M E S E T そして…… 上（後書き）

G E M E S E T

優勝者

女子二十五番
長谷川千雨

G E M E S E T そして…… 下（前書き）

いよいよ次話にてフィナーレです、読んでくださってありがとうございます！

感想、もしあれば書いていただければ幸いです。

G E M E S E T

そして……

下

静かな部屋の中、ただ食べ物を食べる音だけがする。

お互い、何も話さない……今は千雨も、自分のお腹を満たすことを優先する。

『さて……食事もすんだことだし、帰る前に何か聞いておきたいことはあるかしら？』

食事がすんだ後、鳴浜は腕を組んで聞いてきた。

『いくつか質問していいか？』

『どうぞ、何が聞きたいのかしら？』

そう聞かれてから、考える。

さて、何から聞くな……

『まず、ネギ先生は生きてるのか？』

『あら、おかしなことを聞くわね。貴女も見たはずよ？彼は死んだ……これは事実よ』

まあ、もっとも私の本意ではなかったのだけど……

『……ハ、十歳やそこのガキの命まで奪ったのかよ。ヘドがでるな』

……やっぱり、アレは作り物じゃなかったのか。いくらなんでもやりすぎなんじゃねえのか…？

『で、他には？』

『そうだな、軍人の数が少なくなってるのはなんでだ？』

『よく気付いたわね、私達が帰りに乗る船以外は全員返したわ。仕事は終わったんだもの、いつまでもいる理由はないでしょ？』

『……次の質問だ。アンタと、残った軍人もどきの連中の正体を教えてもらおうか？』

『……質問の意味が分からないわね。それじゃなに、私達は軍の間ではなくどこか別の組織に属しているとでも？』

『少なくとも、私はそう考えている。…つか、そろそろ腹割って話そうぜ。軍の人間がいないんなら、なおさらな？』

こっちには、いつまでもアンタに合わせてる義理はないんだ。超の顔も殴ってやらなきゃならねえしな。

『……仕方ないわね、左海。秋也達はもう着いてるかしら？』

ハ、と観念したかのように言う。と鳴浜は室内で待機していた男を呼ぶ。

……シュウヤ？

おかしいな、その名前どこかで……と、考えるまでもなく答えはすぐに出てきた本人を前にして解決した。

『……前回の大会において、複数で脱出した男……七原秋也か。まさかこんな所でニュースの有名人に会えるとはな』

思わぬ人物の登場に、多少の驚きと納得がいった。

つまり、鳴浜達は反BR組織に属している反乱グループってわけか。続いて入ってきたのは超、その後に四葉、ザジと続いて神楽坂、死んだと思っていた長瀬が入ってきた。

……古と鳴滝姉妹の姿がないな。てことは、三人は死んだということか……

空いた椅子に、それぞれ座った所で神楽坂が口を開く。

『久しぶりだね、千雨ちゃん』

少し困ったような感じの声色だ。

……ああ、お前もいまいち現状がわかってないんだな。なんて思いながら

『ああ、久しぶりだな』

と、だけ返しておいた。

……あ、超を殴るの忘れてたな。

まあいい、後にするか。今はそれより大事な今後の話があるはずだ。

『さて、全員揃った所で今後の話でもしましょうか。秋也、頼める？』

『まず、これから残してある船に全員乗ってもらおう。この際、中に

残っているクルー達が銃を向けてくるだろうけど、そこはこちらで対処するよ。彼らだって命はほしいはずだから、状況が変われば働いてくれるはずだ』

その後を、左海と呼ばれた男がすまなそうに続ける。

『あいにく、簡単な操縦しかできる人間がいなくてね。だが、君たちに危険が及ばないようにはするから安心してくれ』

『で、行き先は反BR組織ってわけか……ま、こうなった以上元の生活に戻るはずもねえしな』

話の流れはわかった、相変わらず神楽坂は頭に？を浮かべたような顔してるが、行動すれば自然にわかることだ。

それより……長瀬に関しては聞いてすらいらないな。

完全上の空だ……鳴滝姉妹が死んだのを、まだ引きずってんのか……？

『……超殿、ひとつ聞いても構わぬか？』

『……何ネ、楓サン？』

『何故、拙者だけ生かして……風香殿達を見殺しにしたのでござるか？』

『……楓サンを追い込むためネ、彼女達を生かしていたが為に、楓サンが死んでしまったては大幅な戦力ダウンになるヨ……それでは困るネ』

……超の言うことは、確かに一理ある。大人と戦うってんなら、一人でも強い奴が味方にいる方がいいからな。

ま、そんなことで長瀬が納得できるとは超も思っちゃいないだろうけど。

『……そのために、そのただけに見殺しにしたのでござるか……！
？人の命、なんだと思ってるのでござるか！？』

ほらな、案の定長瀬が超に噛み付いた。

慌てて神楽坂が間を取り持とうとするのを眺めながら、改めて七原を見る。

俯いて、何考えてんのかよく分からないが僅かに見える表情は哀しみに満ちていた。

こうして見てると、連日世間を騒がしている七原秋也という男も、やはりただの弱い人間なんだと納得させられる。

確か、女を一人つれて逃げたと聞いたが……そいつはこの場にないらしいな。

パンツ……

ぼんやり辺りを観察してた私の耳に、平手打ちの音が入った。

視線を向けると、マキと呼ばれてる女が長瀬の頬を叩いた後だった。

『命があっただけありがたいと思いなさいよ。彼女だって、好きで見棄てたんじゃないってことくらい分からないの？貴女がこの場で怒ったって、死んだ人が生き返るわけでもないでしょ！貴女が怨むべきは彼女じゃない……こんなゲームを作った国そのものでしょ……？そんなことも分からないんなら、そこいらにいるガキと同じよ！』

『……それに、大切な人を失ったのは貴女だけじゃないですよ。神楽坂さんも、そして超さん自身も……くーさんの命を代償に今を生きてるんです』

マキの言葉に続いて、四葉が話す。

神楽坂にとっては近衛や桜咲、超にとっては古か……まさか、親友を殺してとは思わなかったが、だとすれば超の心の奥底はどんな気持ちで渦巻いてるんだろうか……

『最後に、ここにいる君たちに頼みたいんだ……少しでも早く、君たちや俺達のような人を作らないためにも、力を貸してほしい。共に、戦ってくれないか……？頼む』

立ち上がり、七原が私達に頼んできた。

その悲痛なまでの叫びに、超達三人が頷く。

私も、神楽坂と目をあわせた。どうやら、お互い考えてることは同じらしい。

『楓ちゃんは……どうする？』

『……やるしかないでござろう。拙者のような思いをする者を、増やすわけにはいかないのでござるからな』

その後、長瀬は超にきちんと謝り場はなんとか落ち着いた。

……殴ってやろうかと考えてたが、超の覚悟を知っちまったからな。残念ながら中止にしておくか。

なんて考えながら、神楽坂達と一緒に学校を後にした……

エピローグ、おかえりの意味（前書き）

これにて終了です、自分のつたない文章からでも、何かを感じとっていただけたら幸いです。

読んでくださってありがとうございました！

エピローグ、おかえりの意味

『あら、おかしいわね……船のクルーは残しておくように言っていたのに』

困ったような声で、鳴浜が船の中を見渡しながら歩く。

その後を歩きながら、私達も周りを見る。

確かに、残ってるはずの軍人がいる気配はない。とりあえずということで、全員揃ってメインブリッジまできてみた。

中から、微かに言い争う声がする。

『…………俺は喋るのが苦手だ。もう一度だけ言う、死にたくなければ操縦しろ』

サキが扉を開けると、制圧されたブリッジに集められた軍人とそいつらに銃を向ける男が一人いた。

『そこまでにしときなよ、風間。それで殺したんじゃ計画が狂うだら？』

…………ああ、こいつも仲間か。てっきり何処かの第三勢力が現れたのかと思っただぞ。

『…………きたか』

それだけ言つと、銃をおろす。解放された軍人達は観念したのか命欲しさに船の操縦にとりかかっていく。

あと少し遅れてたら、帰れなくなってたかもしれないな……と考える

るだけで苦笑いがでた。

やがて、船は出航する……デッキにでて、離れていく島を神楽坂と一緒に眺めた。

『……これから、色々大変だな』

『……そうだね、でも終わりじゃない。まだまだ生きてる限りはやること、沢山あるよね』

『……ま、せいぜい無駄死にだけはしないようにするさ。生かされた命だからな』

『……そうだね』

そして、無言……お互い、島での記憶を思い出す。

嫌なことばかりだったが、そんななかでも少しはいいこともあった。

自分の考えを改めることができ、そして仲間を得た。

今後は、その仲間のために行動しようとして、ふと思いついた。

『そういえば、おかえりなさいってのはどういう意味だ……？』

外が冷えてきたのもあり、神楽坂と揃って直接本人を訪ねてみた。

『え、おかえりなさいの意味？』

『ああ、マキは私がついた時、そういつてくれただろ？それが、なんでなのかなと思ってな』

『サキが初めてきた時も、おんなじこと聞いたよね？おかえりなさいつて、そんなに变かな？』

マキは困ったように同室にいたサキに聞く。

そんなマキに助け船を出すかのように、言葉がつむがれる。

『今から行く場所にいけば、あんたたちも自然とわかるさ。变かどうかは、自分達で決めなよ』

その後、長い航海を終えた私達はある場所に連れてこられた。複数あるアジトの一つらしい……よって、船のクルー達は港につく前に救命ボートで解放された。今頃は、味方に助けられてる頃だろう。

中に入ってまず驚いたのは、年間もない子供たちが沢山いたことだ。ネギ先生くらいの子供から、それこそ赤ん坊までいた。

『ここは、シエルターと呼ばれる。君たちのようなゲームを脱出した人達を匿う場所でもあるが、それ以上に反BRによって親を失った子供達を引き取り、育てる場所でもある』

案内をしてきている左海が、重い口を開いて説明してくれた。それに、マキが付け加える。

『うちの組織では、BR法の犠牲になった子供を匿って、引き受け

てくれる里親を探しているのよ。ここは、里親が見つかるまでの間は、あの子達にとつての臨時の家みたいなもの』

『だからこそ、おかえりなさい。か……』

サキの言っていたことを思い出し、納得する。

子供達にとつては、本当に帰る家が見つかるまでの間、この場所が家なのだから…

左海が、慎重に口を開く。

『此処に来る人間には、最初に言うことにしている。ここで面倒をみるのは、犠牲者達だけだ。決して、犯罪者を高跳びさせるための場所じゃないし、踏み台にしていいいところでもない。同じ考えのもと、共に戦ってくれる者だけを受け入れる場所なんだ』

納得した様子を見せながら、高科という名の男が口を開いた。
なんでも、軍人側から寝返ったやつらしい。

『残された家族は、更正の名目で監視化に置かれて政府の駒になるべく再教育されるからな……こうして救出するのは、本人たちの為になる、しかしざというとき子供達はどうなるんだ？』

『……そうだな、ここが避難所だったのは分かったが、いざ敵が踏み込んできた時、非戦闘員かどうか区別してくれるほど、あいつらが悠長な連中だとは思えねえな』

『もちろん、その事については考えてある。安心して生活してくれ、君たちにはここを拠点に行動してもらうよ。マキ、あとの説明は任せる』

『わかった、秋也達によろしくね？』

左海は、私達に一礼すると部屋を出ていった。
マキの話では、また別の任務があるらしい。

その後、マキから自室の場所など生活のすべを聞いて案内してもらった。今後は、七原達の指示のもとで私達が、違う誰かを救う番だ……

死ななかったことを後悔はしない、今やれることを精一杯やっていこう……死んだクラスメートのため、自分のため、仲間のため……

どこまでもいい、精一杯でいいから、走り続けよう！

私は心にそう誓い、新たなスタートを切った。

そして……数年後、私達は長い潜伏を終え、ついに政府に反撃の狼煙^{のろし}をあげる。

かつてのリーダー、三村はもういない。組織の名前も、明けの砂漠から名を変えた。

秋也やサキら、七人をリーダーとするワイルドセブンへと。

今じゃ、私達あの頃の生き残りも、立派な戦力へと成長した。

そして……私達の大人への宣戦布告が始まる。

『秋也、マキから伝言だ。メディアジャック、いつでも可能だとさ？』

『ありがとう、千雨……よし、じゃあ始めようか』

『カメラスタンバイオッケー、いつでもいけるよ、千雨ちゃん』

カメラの準備を整えた明日菜が、私に合図を送る。

その私は、スイッチを入れると秋也達に合図を送った。

皆で作った、ワイルドセブンの旗の前に、秋也達が立つ。

そして、銀色のカラシニコフ…秋也が愛用の銃を片手にゆっくり語り出す。

『……齋は投げられた。オレ達は、かつてオレ達を殺しあわせてきたすべての大人を許さない。共に立て。そして共に戦おう。オレ達は今、すべての大人に宣戦布告する！』

そして、また私達の戦いは続いていく……いつか平和な世の中がくることを信じて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1818i/>

ネギまロワイヤル

2010年10月17日05時06分発行